モンスター・ハンター・ドス～俺の彼女は古龍達～

THE・ザッチャン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
モンスター・ハンター・ドス～俺の彼女は古龍達～

【Ｎコード】
Ｎ７４５２Ｉ

【作者名】
ＴＨＥ・ザッチャン

【あらすじ】
ジャンボ村で普通に狩りをして普通に生活していたシンに迫り来る非日常のハーレムという生活。
それにより次々と巻き起こる様々な問題。
シンは無事に平和なハンターライフを過ごすことが出来るのか？
バトルあり、エロあり、擬人化ありのはちゃめちゃハンターライフ

をお楽しみ下さい。

プロローグ（前書き）

敢えてモンスター・ハンター・ドスの世界観で書かせていただきます。

何番煎じか分かりませんが擬人化ハーレム小説です。

えっちぃシーンも出来れば入れていきたいと思うのでこうご期待。

プロローグ

俺の名前はシン。

ハンター歴五年の独身２３歳。

ジャンボ村と言う小さい村でハンターとしてそれなりの結果を残し楽しく生活していたのだが、

『人間、我の夫になれ。

ならなければ食らうぞ。』

何故か青髪美女に脅迫？っぽい求婚をされました。

いやいや、普通に考えてこんな状況喜ばないわけないんだけどね。

俺クエスト終了直後でボロボロなんだよ。

しかも相手は普通のモンスターではなく古龍の炎王龍テオ・テスカ

トル。

今まで何度か撃退して弱らせておいたのを今日此処砂漠で討伐したのだ。

その証拠に青髪美女の少し後ろに死体が横たわ……

……あれ立ち上がってこっちに歩いてきてる。

えっでもしっかりと俺の獲物ブラッシュデイムで頭をかち割った筈、何故生きてるんだ？

俺がそんな思考の渦にとらわれていると

『ナナ、お前俺の嫁さんだろ。

何堂々と人間なんかと浮気してんだよ。』

『五月蝿い、雌が強い雄につくのは当たり前じゃろう。

おぬしのようなブ男よりこっちの人間が気に入ったのじゃ。

さっさと立ち去れ。』

青髪美女と喧嘩が始まった。

謎の美女は……（前書き）

プロローグ変な終わりかたですみません。

今度はそこそこまともに書けたと思います。

それでは早速読んで下さい感想とか待ってます。

謎の美女は……

今、俺はとてつもなく混乱している。

何故ならあの炎王龍が青髪美女ナナに敗北し俺の目の前で俺を睨みながらプーギーのように大人しくおすわりしていて、その炎王龍に勝ったナナは俺の右腕に抱き着きながら

『この人間は我の夫、貴様は我達の下僕分かったか？』

などととんでもないことを言っているからである。

しかもそんなことを言われている炎王龍も悔しそうに顔を歪めながら

『分かりました。

先程は生意気言ってすみませんでしたナナ様、旦那様。』

と返事を返し器用に頭を下げたので俺の混乱はピークに達した。

だってあれだぞ炎王龍倒して休憩してたら青い髪でインナー姿の顔もプロポーションも完璧な女性が出てきて夫になれって言ってきてわけが分からず困ってたら倒した筈の炎王龍が復活して美女と喧嘩したと思ったら下僕だぞ。

整理するため頭の中で思い返しても意味が分からん。

なのでこの状況を理解するため右腕に抱き着いてるナナを引きはッ……引きはがッ……すのは断念して

『ナナだったか？なんで俺を夫に選んだんだ？』

かなりの力で俺の右腕に抱き着いているナナに質問をした。

するとナナは俺の顔をジ～と見つめ

『主は話しを聞いてなかったのか？

雌は強い雄につく、すなわち我の夫に勝った主が次の我の夫じゃ。』

と言ってさらに強く抱き着き密着してきた。

思わず密着したために俺の腕を挟み込むように変形した二つのお山に目線が移動しそうになるがそれをぐっと我慢して

『俺が勝ったお前の夫って誰だ？』

さっきの返事で疑問に感じたことを聞いた。

するとナナはキョトンとした顔になり先程下僕になってしまった炎王龍を指差して

『主は何を言っとるのじゃ？

目の前におるであろう。』

とさも当然であるかのようにこう返してきた。

おかしい、実におかしい。

この隣にいる美女が炎王龍の奥さん！？

モンスターと人間が夫婦なんてありえないだろう。

と質問したせいでさらに頭の中が混乱した俺の肩をナナは叩き満面の笑みを俺に向けるとこう言った。

『よろしく頼むぞ、主。

改めて自己紹介しておこう我の名はナナ、ナナ・テスカトリのナナじゃ。』

その瞬間混乱がＭＡＸになった俺はナナが何か言っているのを聞きながら意識を手放した。

早速夫婦の営み！？

『主の寝顔は可愛いのぉ。

そうじゃ、寝ている間に味見でもしておこう。

下僕はさっさと向こうに行っておれ。覗くでないぞ。』

『分かった分かった。

ほどほどにしとけよ。』

俺は腹部に感じた重みとそんな物騒な男女の会話が聞こえたことでなんとか意識を取り戻し

『食われてたまるかあぁぁぁぁ！！』

と叫びながら起き上がろうとした。

そう、起き上がろうとしたのだ。

結果から言うと無理だった。

腹部の重みの正体は自分のことをナナ・テスカトリのナナと名乗る謎の美女。

その謎の美女ナナはその細い体のどこにそんな力があるのかと疑問に思ってしまうほどの力で俺の肩を掴み押さえつけると

『大丈夫じゃ、食いはせん。味見だけじゃ。

主も助かったの。繁殖期なら間違いなく干からびるまで愛でてしまっていたぞ。』

妖艶な笑みを浮かべそんなことを言うと肩を掴んでいた手を離し、今度は俺の顔を固定するように両側からその手をそえ体を俺に密着させて動きを封じると目を綴じその綺麗な顔を近づけ……自分の唇と俺の唇を重ね合わせた。

……これってあれだよな。キスだよな。

ドンドルマにいた頃酔った勢いでパーティーにいた彼氏持ちの女にしてビンタをされて以来ご無沙汰だったキスだよな。

あまりにも久々な唇の感触に顔が真っ赤になるのを感じながらそんなことを思い出していると俺の唇が生暖かい物にこじ開けられそれが俺の歯をつついているのを感じた。

その感触にこの物体がナナの舌だと理解した俺はそれをやられると理性が崩壊すると判断し急いで半回転して上下を逆転すると

『これ以上は無ｒ『駄目じゃ、まだ味見が出来ておらぬ。』

止めるよう言おうとしたのだがナナに途中で遮られると首に腕をまわされ腰を足でがっちりホールドされて引き寄せられてしまい再び唇が重ね合わさってしまった。

しかも今度は少し乱暴なナナの舌に歯の壁が突破され舌の侵入をゆるしてしまった。

慌てて押し返そうと出した俺の舌にナナは器用に舌を絡めるといやらしい音をたてながら俺の口内から唾液を吸い出し飲み込むと今度は自分の唾液を流し込んできた。

そして俺がそれを反射的に飲み込んだのを確認すると口を離し満足したように微笑むと

『味見終了じゃ。中々主は上手かったぞ。』

と言って俺の拘束を解き手足を放り出して寝転んだ。

その言葉も理性を保とうと頑張っている俺にダメージを与えふと目に入ったどちらの唾液で濡れたかもわからないナナの口元に俺の理性は多大なダメージを受けてしまい崩壊一歩手前まできてしまったので慌てて立ち上がると

『知らない女を抱けるほど俺は飢えてなんかいないんだあぁぁぁぁ！！』

と叫び声をあげ自分に言い聞かせるとナナに捕まったりしないよう全力でその場から逃げ出した。

早速夫婦の営み！？（後書き）

今回は微エロを目指して書いてみました。

シンはこの話しで分かるように結構へたれです。
逆にナナはえっちぃのですが作者自身経験が少ないので上手く書けない可能性がかなりあります。
へたれは任せろって感じなんですけどね。

これからキャラが増えるともっと今回のようなシーンが増えると思うのでアドバイスまたは感想を心よりお待ちしております。

不思議娘登場（前書き）

新キャラが出てきます。
そいつはあるアニメのヒトデが大好きなキャラを参考にしたので不快に思う方もいるかもしれませんが御了承ください。

不思議娘登場

逃げ出して数分、疲れてきた俺は適当に見つけた岩に座り溜め息一つ。

そして辺りをぐるっと見回して再度認識するとまた溜め息をついた。

俺……迷子になりました。

いやだって気絶する前は砂漠だったから安心してずっと頭の中で煩悩退散って繰り返しながら適当に走ってて漸く落ち着いたから冷静に周りを見てみると見渡す限り木ばっかり。

密林かな？とも思ったけど日が沈んだのに雨が降ってないのでその可能性は消えた。

森丘の可能性もなくはないが此処まで木が生えたエリアはなかった筈だからこれも消去。

となると此処は今までギルドの連中も見つけ出せなかった場所となる。

絶望的だ。ある程度知っている所なら帰れたかもしれないがギルドが知らないということはハンターである俺が知るはずもない。

結局悩んだあげく何も解決策が見出だせなかった俺はもう一度溜め息をつき後ろに倒れ込んだ。

倒れ込んでる時に気付いたんだけど俺岩に座っていたよね。
その岩寝転べるほど大きくなかったよね。
ということは

『へぶッ！！』

はい、落ちました。しかも頭から。
まぁこの変な声は気にするな。
しかしこんな不幸続きの痛みで悶絶中の俺にも良いことはあるようで

『人間は岩から落ちて頭をぶつけると奇声を発して悶絶した。
よし、メモ完了です。これでこの人間を連れてかえればお姉様にあんなことやこんなことを……。』

ぶつぶつと呟きながら布切れに何か書いていたと思ったら急に自分を抱きしめてくねくねし始めた紫の髪の丸い眼鏡をかけた少女を発

見した。

一瞬聞くのを辞めようかと思ったが情報源をなくすのは辛いので俺は頭の痛みを我慢し少女に近づいて

『ちょっといいかな？

君は此処の出口までの道のりを知らないかい？』

と危ない雰囲気なので少し離れた所から質問した。

質問したのだけれど少女は気付いてないのか今だくねくねしたままだ。

しょうがないので俺はそのちょっと危ない雰囲気の少女に近付き肩を叩いてもう一度質問しようと口を開いたが

『はっ！！いつの間に移動したですか。

分かりました。気配を消して接近し襲おうとしてたのですね。

しか～しミズハは天才ですからそう簡単には捕まりませんよ。

捕まえられるものなら捕まえてみろです。』

と急に饒舌になりそう言うと俺から逃げるように走り出し景色に溶け込むように姿が見えなくなった。

突然少女が見えなくなって驚いたがあの不思議娘に関わらなくていいことに内心ホッとした俺はまたさっきの岩に座りなおし

『間違えました。

人間、姉様の所に案内するから着いてきやがれです。』

再び現れた少女にびっくりして再び頭から落ち同じ所を打った痛みのあまり気絶した。

最後に見えたのは人間を辞めたくなるほどに蔑んだ目で俺を見ていた少女でした。

不思議娘登場（後書き）

気絶オチばかりですみません。

感想またはアドバイス待ってます。

不思議娘の思惑

再び気絶してしまっていた俺は焼けるような暑さに目を覚ます。
現状を確認するため周りを見てみると下は真っ赤な毛の生えた生き物、下僕に成り下がってしまった炎王龍だからこいつがあの戦う時厄介だった炎の膜みたいなのを纏って俺を運んでいるのだろうと推測。
そしてあの不思議娘は何処だろうとさらに視線を動かせば

『もっと早く歩くです。
そんな風にのろまだからその弱っちぃ人間に負けてミズハの大事なお姉様を盗られるんです。』

少し離れた所で偉そうに文句を言っている少女を発見した。
心なしかあの少女が馬鹿にするたび俺の周りの気温が上がっているような気がする。
恐らくこの俺を運んでいる下僕の怒りが溜まれば溜まるほど炎が熱くなっていくのだろう。
そうだとしたら間違いなくこのままいたら焼け死ぬので下僕の背か

ら急いで飛び降り

『運んでくれてありがとうな。

それより気になってたんだがあのちっこい娘は何なんだ？』

怒りを少しでも減らそうと下僕に感謝の言葉をかけた後本当に気になっていた少女の正体を聞いてみた。

下僕は『やっと起きたか。』と呟いた途端発光し一瞬で赤い長髪のイケメンになると背伸びしながら

『あのガキはオオナズチのミズハ。

聞いての通りナナのことが大好きな変態だ。』

とっても分かりやすく教えてくれた。

それにしても変態でオオナズチとはあのステルス状態で何かしでかしそうでとても不安になるのは俺だけでしょうか？

まぁそんなことはどうでもいいので一先ず忘れて下僕ことティオと

結構楽しく会話をしていると今更気付いたのかミズハがこっちに近づいてきて

『あぁッいつの間に起きていたですか！？

早くミズハに着いてくるです。

お姉様に愛でてもらえるかどうかは人間にかかっているのですよ。』

とまくし立てるように言うと俺の手を掴みかなりの速さで走り出した。

しかし所詮は少女。俺も余裕で着いていける筈なのだが妙に体が重く上手く走れない。

起きてる間はこの変な感覚はなかったのでこの原因があるとすれば意識のない時だろう、よって俺は意識のない間も恐らく俺の近くにいたであろうミズハに聞くことにした。

『なぁ、俺が寝てる間に変なことしてないか？

体が重たくて上手く走れないんだけど。』

『み、み、み、ミズハは何もしてないですよ。』

分かりやすすぎるくらい動揺したので犯人はミズハに確定。
あとは何をしたか吐かせれば良いんだがさっきミズハが言ってたことを利用して

『そっかぁそしたら俺此処で休んでティオと一緒にいくわ。
ミズハだったっけ？先に行って後から行くって伝えといて。』

『それは駄目です。
ミズハの毒霧で弱った人間をお姉様の所に連れて行かないとミズハが愛でてもらえなくなってしまうです。』

この娘面白いぐらいに素直だ。
ちょっとかまかけただけでこうも簡単に証言するとは……ナナの所に行くまで俺の玩具に決定だな。

古龍の謎

ミズハを俺の玩具に心の中で決定してからと言うもの鬱憤が溜まっていたであろうティオと一緒にいろいろミズハをいじったりして遊びながら進んでいると

『ぬし～やっと帰ってきたのか。
突然逃げ出すから寂しかったのだぞぉ。』

ふて腐れて寝転んでいるナナが待っている場所に到着した。
ミズハがいれば確実にナナの元に突っ込んでいるのだろうがあの少女は遊んでる最中にまたくねくねし始めたので置いてきてしまった。
一応置いてきてしまって本当に大丈夫だろうか？などと少しあの少女を心配しているとナナが起き上がってこっちに歩いてきて

『此処は我が昔、古龍の友と世界中を旅して見つけた隠れ家の一つじゃ。
今でもたまに此処でみんなと遊んだりしておるのだぞ。』

と此処の説明をしながら俺の腕をひき、さっきまで寝転んでいた所まで誘導し座るとまた腕に抱き着いてきた。

そこでまた襲われるのかと内心びくびくしていたが何もなさそうだったので

『古龍ってどうなってんだ？

頭かち割っても死んでないしナナ達は人なのに古龍だって言うし意味が分からん。』

チャンスだと思い今まで疑問に思っていたことを聞いてみた。

するとナナは少し悩んだ後

『主は古龍の生態が何故未だ知られてないか分かるか？』

そんなことを聞いてきた。

俺はそれに答えるため頭を回転させ考えたが確かにこれは今まで疑

問に思わなかったのがおかしいくらい謎だ。
自分で言うのもあれだが俺はそれなりに腕利きハンターで名が売れてたから古龍の討伐依頼を何度も受け実際に何度も討伐したのだ。
古龍学者の奴らがその死体を調べれば生態何か簡単に分かる筈、では何故知らないのか。
俺は目でナナに説明するよう求めた。
するとナナは俺の腕を離し前に立ち意地悪な笑みを浮かべると

『答えられないなら教えてやらぬ。
まぁ主から深いキスをしてくれるなら別じゃがな。』

なんとも卑怯な交換条件を持ち出してきた。
俺は悩んだあげくティオに助けを求めることにしティオに視線を送るとティオが口を開く前にナナの

『主に教えたら姉上の所に縄で縛って置いていくぞ。』

と言う声が響きティオが顔を真っ青にそめて逃げ出した。
俺が情報源を失い絶望していると急に後ろに引っ張られ倒れ込んでしまいその瞬間ナナに馬乗りされて

『邪魔物はいなくなった。
さぁ主、存分に我の唇を味うのじゃ。
誰も見とらぬしそのまま最後までやっても我等は夫婦じゃ悪いことなど一つもないのじゃぞ。』

耳元でそんなことを言われた。
今更ながら俺の格好は装備を剥ぎ取られてインナーだけ、そしてナナもインナーで今は密着した状態。
俺の肌に触れている二つのお山の感触だけでもあれなのに深いキスなどしてしまえば間違いなく息子が暴走してしまうのだ。
なのでどうにか抜けだそうと辺りに視線を動かしていると

『あッ人間、お姉様と何羨ましいことしてるですか！！

ハッ分かりました。お姉様の羞恥心を煽るためお姉様からキスするよう脅したんですね！？

何て卑劣なことを……お姉様今助けるです。』

大分勘違いしてるみたいだが半分忘れかけてたミズハが登場した。

謎解きは三人で（前書き）

ちょいエロ入ります。

引き続き感想、アドバイス待ってます。

謎解きは三人で

勘違いをしてはいるがこの現状を打破出来るのは

『お姉様あぁぁぁぁ！！』

とか色々叫びながらでこっちに来ている救世主、ミズハしかいないのでミズハの活躍を祈り俺は目を綴じた。

すると突然クスクスと笑い声が聞こえてきて何か嫌な予感がした俺は急いで目を開けるとナナが俺を見てもう一度笑いミズハがあと少しという所まで来た瞬間

『ミズハ、我はもう主に身も心も許したのだ。

その証におぬしが我と会う前には体液をお互いで飲みあったりもしている。

おぬしに助けてもらう必要はなくなってしもうたのじゃ。

そうじゃなぁ、我と一緒に主の家族にならぬか？』

正しい事を言ってはいるが誤解を生みそうな説明＋本人である俺の承諾無しの衝撃的な提案で俺にとっての救世主ミズハの動きを完全に止めた。

動きを止めたミズハはこの世が終わったかのような顔をしていたが嘘と言ってくれることを信じて僅かな希望に縋り付くようにジーッとナナを見つめ始めた。

この状況では眼鏡で隠れて上手く見えないが涙目にでもなっているのだろうナナはうッ、と声を詰まらし俺とミズハの間で視線をいったりきたりさせたあげく

『我慢できぬ。ミズハこっちに来い。

主と一緒におぬしも愛でてやる。』

とんでもないことを言いやがりました。俺は慌てて

『ナナ待て。俺はそんなことやらないぞ。

それに俺の質問はどうなった！？

まだ答えてくれてすらないだろ。』

拒否するとともに話しをどうにか逸らすため精一杯の努力をしたのだが

『主が早くキスせぬのが悪いのじゃ。

ミズハも乗り気のようじゃしことが終わってからでもよいじゃろ。』

一蹴され敢え無く撃沈。

もうどうしようもないと諦めた俺はせめてもとこれから行われるであろう行為を見ないため目を綴じた。

それから少しすると胸部にミズハでも乗っかったのであろう少しの重みと湿っぽい何かを感じそれと同時に

『お姉様ミズハはもう我慢できないです。人間なんて放っておいてミズハを愛でてください。』

『ふっ、そう毛嫌いするな。

終わるころにはミズハも主のことを好きになっておる。

ほら、舌を出せ我慢できぬのであろう。』

なんて危険な会話が聞こえその直後何かを啜る音や舐める音が聞こえ臍の辺りに雫が零れた。

多分俺の腹の上で舌を絡めあっているんだろうがそんなことをしたら……ねぇ。

息子が起き上がっちゃうわけですよ。

しかもさ、大分ご無沙汰だから息子も元気でね。

飛び出しちゃったのインナーから。

だから直したいんだけどな、動いたらばれる可能性が……

『こんなに元気にさせてやっぱり主もやりたいのであろう？』

『なんですかそれは！？

グロいです。キモいです。早くしまえです。』

『まぁそう言うな、ちょっと主を押さえておいてくれ。』

まぁ当然と言えば当然だけど二人にばれちゃいました。

俺は隠すため慌てて起き上がろうとしたのだがそんな余裕もなくミズハに押さえこまれその瞬間

『んっ主のは大きいな。』

息子が暖かい何かに包まれとてつもない快感が背筋を突き抜けて俺の頭は何も考えられなくなった。

謎解きは三人で（後書き）

終わらせかた相変わらず下手ですね。すみません

自由な世界へ

俺は現在、自己嫌悪に陥っている。

あの何も考えられなかった状態の時、俺はおそらく理性が崩壊して本能のままに動いていたのだろう。

気が付けば俺の両隣でナナとミズハが息を乱しながら顔や体を涎れやら白い液体やらで汚したまま眠っていて、俺はとてつもない怠さと息子の痛みに襲われていた。

それだけで何が起こったかなど直ぐに思い出した。

あの艶めかしいナナやミズハの喘ぎ声に動かされ本能のまま獣のように腰を振り、数時間前に自分が叫んだことすら忘れ無我夢中で二人と交わったのだと。

何が俺は飢えてないだ。

思い切り襲っているじゃないか、しかも良く見れば白い液体に混じって赤っぽい液体があるのを発見。

おそらくミズハは初めてだったのだろうそれを相手のことも考えず本能のまま奪ったとしたら……よしもう奴隷にでもなってやろう。

俺が人間であること事態が申し訳ない。

そう思い俺は二人にどうにかインナーを着せた後反省のため正座で二人の目覚めを待つことにした。

やばい足が腐る。

正座を開始してから二時間経過し足が痺れすぎて感覚がなくなってきた頃

『もっとイジメてくださいおねえさ……そこでなぜ人間になるですか……死にさらせです！！

やったですよお姉様ご褒美を……えへへ。』

と寝言で大声をだしたかと思うとミズハが突然暴れ始め横に転がった瞬間ナナの腹部に見事な裏拳がきまった。

ナナは痛そうに顔を歪め目を覚ましキョロキョロと辺りを見回し俺

を見付けると立ち上がろうとして……へたりこんだ。
まぁ何回もやったから腰が砕けたんだろうと思っていると、そんなに俺の所に来たいのか四つん這いになってこちらに向かってくると

『ぬしぃ～我はもう決めたぞ。
絶対に主を我の夫にする。
あんなに気持ち良い交わりは初めてじゃ。』

と猫撫で声で言うと真正面から寄り掛かるように抱き着いてきた。

『んにゃあああぁぁぁぁ～』

奇声発してすみません。

でもね足がね……足がヤバイんですよ。

もう痺れると言うより痛いそれも激痛と言って良いほどに。

しかもその原因になってるナナはさっきの奇声に驚いたのか俺を見たまま固まっている。勿論体重をかけたまま。

そんなのに堪えられるわけもなく少しでも楽になろうと俺は横になったのだがナナも抱き着いた状態のため上に乗っかってきた。

しかも運悪く

『うぅ～腰が痛いです。

あれっお姉様は……あぁッまた人間とするつもりですか！？

このミズハの目が黒いうちは絶対にそんなことさせないです。』

ミズハの目が覚め四つん這いで近づいてきた。

俺は痺れに伴う痛みに悶えながら何かさっきの再現みたいだなぁ、と何の気無しに眺めていると本当に再現でもしたいのかナナがクスクスと笑い始め

『何を言うておるのじゃミズハ？

初めてなのに主に突かれて最初から感じよがっておった変態のくせ

に。』

再び言葉だけでミズハの動きを止めた。

しかし今回のミズハは違っていた。

顔を赤らめながらもさっきまでお姉様と言ってデレデレだったナナを睨むと

『そうです。ミズハは変態です。

初めてなのに人間で感じてもう離れたくないくらい人間が好きになっちゃったです。

だからお姉様には悪いですけど人間には初めてを奪った罰としてミズハの旦那さんになってもらうです。』

うわ〜今度はナナが固まっ……あれっ今ミズハは何て言った？

あまりの衝撃発言だから混乱してしまったぞ。

『ミズハ今何て言った？』

『人間には罰としてミズハの旦那さんになってもらうですって言ったんです。』

やはりもう一度聞いても代わらないか。

ミズハの返事にどう逃げ出すか迷っているとナナが俺に抱き着く力が強くなり

『ならぬ、ならぬぞ主は我の夫じゃ。

そんなこと言うなら今後一切愛でてやらぬからな。』

今までのミズハだったら間違いなく諦めてくれるであろう交換条件をだしたのだが、ミズハは一瞬怯んだだけでナナを押しのけ俺に抱き着き

『べ、別に大丈夫です。

代わりにお姉様から奪った人間に毎日愛でて貰うです。』

と言ってさらに強く抱き着いた。

正直かなり体が痛かったのだがその直後にはナナがそれを剥がしにかかり少しの抵抗ののち二人して後ろに吹っ飛び倒れ込んだ。

そのチャンスを逃がさまいと俺は直ぐさま起き上がり出口向かって痺れる足で走り出し何度かこけそうになりながら途中にあった装備を拾いあげると外に飛び出し近くにいたティオに

『俺と戦った砂漠まで乗せてってくれ。』

と必死にお願いしてその場から逃げ出した。

謎の解明と下僕（前書き）

この話しは若干説明っぽい感じで読みにくいかもしれませんがご容赦下さい。

引き続き感想・アドバイス待ってます。

謎の解明と下僕

俺は今、なんとかナナ達から逃げ切り古龍の姿をしたティオの背中に乗って砂漠に飛んで向かっている。

ティオの説得は大変だった。

そんなにナナが言った姉上なる人物が恐いのか俺が近付くことすら拒んだ程で俺の家に匿うことを条件にやっと了承してくれたのだ。

何が悲しくて男と二人暮らしなどせにゃならんのだとも思ったりはしたが、それでもまだあの二人に襲われるよりはましだろう。

そんなことを考えながら暫く飛んでいると砂漠に到着したのか気温が急に下がり始め俺は寒さを凌ぐためティオに抱き着いた。

流石炎王龍なだけあってティオはかなり暖かくたてがみがうっとうしい以外は寒さを凌ぐのに丁度よかったからだ。

そうやって寒さを凌いでいてふと、ナナに質問の答えを教えてもらってないことを思い出し

『なぁティオ、俺さお前の頭かちわったよな？

何で生きてんの？

それに何でお前やナナは人になれんの？』

ちょっと変な感じがしたが本人に確認を取りさらに気になってたことも聞いてみた。

するとティオは質問を一遍にするな、と溜め息をはきながら下僕の性質なのかそれ以上は何も言わず説明を始めた。

『先ず古龍は首をぶった切るか脳か心臓を壊しでもしない限り死にはしない。

自分でも驚くくらい回復力が高いからな。

でも俺みたいにハンターに追っかけ回されるのが嫌いな奴はハンターにやられるふりをしてハンターが帰った後巣に帰って傷を治すんだ。

因みにお前の攻撃で傷がついたの皮だけで全然平気だから。

それで俺達が何で人になれるかというとあのミズハってガキが人間から盗んだ酒を飲みたいって言いだして俺とナナ以外にも仲の良い二人呼んで試しにみんなで飲んでみたんだ。

そんでみんな少し飲んだだけで眠って、気付いたらみんな人間の姿で人語が話せるようになってた。

これで説明は終わりだ。

丁度目的地にも着いたし今から降りるぞ。』

ちょっと長くて途中睡魔に襲われたが何とか耐え抜き周りを見回すとティオが言った通り午前中俺とティオが戦っていた場所に着いていた。

予定の時間を大分過ぎていて下手するとギルドに死亡扱いされる危険があるので俺と人化したティオは急いでベースキャンプまで行きそこに設置されているクエストの失敗を知らせる青い狼煙をたいて一息つくと、俺達は迎えが来るまで休憩することにして眠りについた。

あれっ！？

『だんにゃ様起きてくださいにゃ～。
だんにゃ様が目を開けにゃきゃみにゃさまがかにゃしみますにゃ。』

そんな声が顔の近くで聞こえ俺は目を覚ました。

目を開けた俺の目に飛び込んできたのは涙目で俺の顔を覗き込んでいる珍しい黒い毛と赤い目が特徴的な我が家の家事を全てしてくれているアイルー、ルビの姿。

普段ならベースキャンプにアイルーが来ることなど無いのだが俺が古龍討伐に失敗したと誰か……おそらく村長にでも聞いたのだろう。

それで心配して駆け付けてきてくれたのか……ヤバイもしそうだとしたら俺泣くかも

『やっと起きたか主よ。いや、主が逃げ出した時はどう殺してやろうかと考えたが我達を自宅に招く準備をしようとしていたのだな。
下僕から聞いた時は嬉しすぎて褒美に下僕を姉上の所まで縛って連れていったくらいだ。』

『そうです。人間のくせに中々やりやがるです。

ますます惚れてしまいましたです。』

良く見ると全然違ったな。

此処俺ん家だ。しかもナナとミズハ付きの。

話しからするとあの下僕さんは俺を売ったようだな、結局姉上って人の所に行ってるけど。

ざまあみろ……じゃなくて何てことしてくれとんじゃい。

こんなことされたら俺干からびるよ。体中に生臭い匂いが染み付いちまうよ。

よし、もうこの二人をどうするかは置いといて下僕をぶちのめしに行こう。

そうしないと気分が悪い。

『ナナにミズハ、下僕にお仕置きしに行きたいからその姉上って人の所に連れていってくれ。』

『それは駄目じゃ。姉上は危険すぎる。

それに何故お仕置きが必要なのじゃ？

下僕は我達に主の居場所を知らせてくれたのじゃぞ。』

『馬鹿だなぁ、それがお仕置きの理由なんだよ。

せっかく準備が終わるまで隠してナナ達に喜んでもらおうと思ってたのに下僕がばらしただろ？』

『あぁッ本当です！！下僕のくせに人間の計画を邪魔するとは許せないです。

お姉様、ユキお姉様はミズハが何とかしますから人間と一緒に下僕をボコボコにしに行こうです。』

『そうだな主の気持ちを踏みにじった下僕を許してはおけぬ。

我も手伝うから主よ、思う存分下僕を痛めつけてやるのじゃ。』

『二人共ありがとう助かるよ。』

……作戦通り。

俺は思わずにやけてしまったが幸い二人共気づいてないので急いで顔を引き締めると未だに心配そうな顔をしているルビの頭をわしゃわしゃと撫で鼻の頭にキスして

『そんじゃあちょっと出掛けてくる。
いつもより綺麗に部屋片付けといてくれよ。』

と笑いながら言って出掛けようとすると

『了解ですにゃ。
ピッカピカにして帰りをお待ちしていますにゃ。』

ルビは敬礼しながらそう答え俺を見送ってくれた。

いかないよ

俺が家を出ると後ろからナナとミズハも着いてきて俺の両隣に来ると

『主がそこまで我達を思ってくれているのは有り難いのだが最後のはいただけないな。』

『本当です。せっかくお姉様と人間を二人の夫にするっていうことで仲直りしたのに。』

と言いつつナナが右腕、ミズハが左腕に抱き着いてきた。

いや、意味が分からん。

最後のって何？二人の夫って何？

それらの思いを込めてナナに視線を向けると……

『何じゃ主？我をそんなに見つめて、照れるではないか。』

『何っ人間、お姉様ばかり見てないでミズハを見るです。

あっでもそれはお姉様に悪いですから人間が頑張って二人同時に見

るです。』

やはりと言うか伝わらなかったのかナナは頬をほんのり赤く染め、ミズハはすねた子供のように頬を膨らませてそんなことを言った。

不覚にもその顔を可愛いと思ってしまった俺はそれを隠すようにデコピンをくらわせ黙らせると

『最後のってなんだ？

それに二人の夫ってあんなことはしちまったが俺は一度も返事してないぞ。』

と質問すると同時に本心のまま話したのだが……止めとけば良かったな。

『嘘であろう主よ？

あんなに激しく後ろから突きながら愛してると囁いてくれたではないか。』

『ミズハの初めてを奪っておいて何言ってるですか。

ミズハ達とは遊びだったですね。』

そんなことを涙目になりながら大声で言っちゃいました。

あのねお二人さんジャンボ村って小さいんだよ。

そんなこと大声で言ったらなぁ。

痛いんだよ、村の皆さんの視線が。

あっヤバイ親方がこっち走ってきた。

俺は急いで二人の腕を掴み家に舞い戻り一息つこうと思ったのだが

『主、嘘だと言ってくれ。

最初に言ったであろう、断ったら食らうと。』

ナナに獣のような荒々しい殺気をあびせられた。

結構慣れてるけどさ、困るよなそんな悲しい顔で言われたら俺そんなにひどい男じゃないんだぞ。

俺は思わず苦笑いしながら

『さっき言ったのはまだ会ったばかりで夫婦にはなれないってだけだ。

俺も二人のことは好きだ、だから一先ず俺の彼女になってくれないか？

いや、なってください。』

ナナとミズハに近づいて頭を下げて告白した。

するとあっという間に殺気が消え失せ次に肩を押されて顔をあげると

『主、疑って悪かった。

我も好きだぞ。だから今日は下僕のことなど忘れて三人で愛し合おう。』

そんな声が聞こえ一瞬で目の前がナナの顔でうまりついで口の中に舌が入ってきた。

少し驚いたが今回は抵抗せずこちらからも絡めていると

『ずるいです。ミズハも交ぜて『師匠、女を二人もだいたって本当……何昼間っから盛ってやがんだ。』

ミズハの言葉を遮り自称俺の弟子が家に入って来てドロップキックを俺にかましてきた。

修羅場！？（前書き）

新キャラ普通に人間出しちゃいました。口調じゃ分からないので言っておきますが女です。

修羅場！？

俺は突然の事に避けれる筈もなく見事に命中し部屋の中央付近にあるベッドまで飛ばされ頭を打ち付けた。

幸いナナが華麗に自称俺の弟子、ランのドロップキックを躱し床に着地した所を上に跨がって押さえつけているため追撃がなく一安心していたのだが

『おぬしは何をしてくれておるのじゃ！！

せっかく主と恋仲になって初めての交わりをしようとしていたというのに邪魔をしおって、許さぬぞ。』

『うるせぇ、こんな昼間っから盛ってるお前らが悪いんだ。

それにオレの師匠は何処の馬の骨かも分からない奴らとそんなことはしない。

なぁ師匠そうだろ？』

喧嘩になりそうだし……この質問はどう答えよう？

俺はランの俺を信じて疑わない目から逃げるようにランから視線を外した。

だって仕方ない……というか無理だろ。

腹の上で美女と美少女があんなことしてて、しかも息子が美女の中に入っちゃったんだよ。

前の彼女と別れて以来二、三年は確実にやってなかった俺の理性が堪えられるわけがないだろ。

と自分に言い訳して罪悪感から逃れようとしていた俺だが……

無理だな。

気になってちらっと見てしまったランの未だに俺が否定することを信じているあの目、罪悪感を感じないわけがない。

でも此処で否定しないとそれはナナ達とやった事自体を否定するわけだ。

俺はランの俺にたいしての評価が下がるのも覚悟して

『すまないなラン。

いろいろとあって……まぁやっちまったんだよ。

でも今はこいつら俺の正真正銘の彼女だぞ。』

と正直に話した。
その瞬間ランの顔が悲しみに染まり少しの間が入った後、驚きで目を見開いたかと思うとミズハを指差し

『こいつらってことはこの美人さんだけでなくそこの小さい子ともやって彼女にしたってことだよな？』

正直触れてほしくなかった所を質問された。
俺は答えないのはいけないと一応頷くことで返答してランから期待を裏切った罰でも受けると思った俺は目を綴じてその衝撃に堪えようとしていたのだが

『……卑怯だ。』

聞こえてきたのはそんな弱々しいランの声。
驚いて目を開けるとランが涙目になりながら近づいてきて目の前で止まり

『師匠は卑怯だ。

格好良くて、オレみたいなひねくれてる奴にも優しくて……それなのにオレの気持ちに気付いてくれなくていつの間にか彼女作って自分だけ幸せになって……卑怯すぎだ。』

と涙を堪えながら話し最後まで言うと泣き崩れた。

俺は反射的というか頭で考える前に体が動き目の前にいるランを抱きしめ頭を撫でて

『気付いてやれなくてごめんな。』

と自然に口からでていっていた。

するとランが俺の腰に手をまわし抱きしめかえして身をよじり顔を覗かせると

『それじゃあオレを女にしてくれ。
師匠に初めてをあげたいんだ。』

もし、ナナ達とやってなかったら一発で襲ってしまいそうな発言をした。

なんとか堪えられはしたが中々のダメージを理性にうけてしまっているのでナナ達が止めてくれるのを信じて再び目を綴じ……それを後悔した。

修羅場から……

少しの間目を綴じていると腰にまわされていた腕が解かれ

『こんなのされても師匠が困るだけだよな。

もう大丈夫。迷惑かけてゴメン。』

と言いつつランが少し離れるのを気配で感じた。

俺も何か言わなくてはと思い頭を回転させある程度考えがまとまり口を開こうと目を開けた瞬間、突然ランに押され

『でももう少し我が儘聞いてくれ。』

後ろに倒れながらそんな声が聞こえベッドに倒れ込むと同時に武器を抜く音が聞こえた。

俺は慌てて起き上がり制止の声をかけようとしたのだが……既にランは得物デスパライズを構えてナナとミズハに切り掛かっていた。

突然のことにナナもミズハも上手く躱すことが出来ずナナは右肩ミズハは左腕に傷を作ってしまい、一先ず距離をとろうと後ろに跳んで……倒れた。

ナナ達は驚いて上手く動かない顔で驚愕の表情を作っているがこれは当たり前だ。

ランの得物であるデスパライズはゲネポス種の素材から作られ大型の飛竜でさえ数回切られれば麻痺する程の毒を内蔵しているのだから人間などくらったら一たまりもない。

そんな毒をくらい倒れているナナ達をランは一瞬見た後ベッドに乗っかって思考が上手く働いていない俺の所に歩いてきて覆いかぶさり

『師匠、師匠は動いたら駄目だぞ。

師匠はオレに襲われただけでこいつらを裏切ったわけじゃないんだから。

それに師匠が動いたら多分我慢できなくなって師匠をオレだけのものにしたくなっちまうからな。』

と耳元で囁くと俺の体中を上から下に撫で回しながら耳や首筋を舐め始めた。

それはたどたどしくじれったいような感じはするが逆にそれが俺の興奮を煽り気力で息子が元気になりそうなのをなんとか押さえて起き上がると

『ラン、こんなことしなくて良いだろ。

俺以外にもいい男ならたくさんいるんだ。

その男が現れるまで一緒に修行したりモンスターを狩って今まで通り過ごせば良いじゃないか。』

ランの肩を押して引き離してから説得した。しかし、ランは首を横に振り潤んだ瞳で俺を見て

『そんなの無理だ。

好きな男が他の女と付き合ってるのを近くで見ていられるわけないだろ。

オレはこの村を出ていく。

だから、最後の思い出にさ……ひゃぅ！！』

と言って再び顔を近づけてきたが突然体を跳ね上がらせるとかわいらしい声をあげ顔を真っ赤にそめた。

俺は少し驚いたが急いでランから視線を外しその原因を探すとランのお尻に顔を近づけている青と紫の頭を発見。

そしてその二つが動く度にランが俺にしがみつきびくびくと震えているので何かしているのだろうと思い

『ナナにミズハ、ランに何をしているんだ？』

思い当たることもあるため若干呆れを含んだ声で質問した。

するとナナが口元が何かで濡れている顔をあげて意地の悪い笑みをうかべ

『新しい主の彼女の歓迎に気持ちいいことをしているのじゃ。

我等を斬ることすら躊躇しない程に主を愛しているのだ。

あと二人の所が三人になろうと変わりはせんよ。』

と楽しそうに言い再びランに気持ちいいことを始めた。

……ちょっと待てよ。

『俺の彼女！？二人が三人！？

何を言ってるんだ？』

と意味が分からなく、いや分かりたくなく質問すると

『何ってそのままの意味です。

ミズハ達は人間と既成事実を作ったから付き合ってるです。

だからこんなに人間のことが好きな小娘もミズハ達公認で合体してもらって人間の彼女にするです。』

『それと二人から三人というのは我の友が二人いるのだが、その二人の好みが厄介なことに我と同じでな。

確実に主のことを気に入るのだ。

因みに美女に美少女だから心配する必要はないからの。』

と顔を交互にあげながらこれからおこるとんでもない予定を発表した。

歓迎という名の……（前書き）

更新遅れてすみませんm（__）m

今回はエロパート＋４ページの長めの話になってます。

それでは駄文ですがお楽しみください。

歓迎という名の……

俺は少し混乱しながらもさっきのナナとミズハの言葉を思い返し頭の中で整理していると

『えっなんで？』

と今までの喘ぎ声とは違うランの悲しそうな声が俺の耳に聞こえてきた。

俺は一先ず思考を打ち切りしがみついてびくびく震えていたランから視線を外して前を見ると相変わらず口元を汚しながらニヤニヤと笑ってランの後ろに立っているナナとミズハが見えた。

その光景をみてもイマイチ状況が把握出来ない俺は質問のために口を開こうとしたのだが

『ミズハ、褒美をやるから少しの間主の相手をして動きを止めておいてくれぬか？

我はこの娘に助言をしなければならぬのだ。』

『了解ですお姉様。
人間を動けなくすれば良いですね。
……ということですから人間、ミズハを弄って時間を潰すです。
』

と会話が終わってこっちに歩いてきて言ったミズハの言葉に絶句してしまった。
意味が分からない。
ナナの事が大好きでそのナナからの褒美（おそらくエロい事）をしてもらえるのに何故、力ずくで俺を押さえず弄らせて時間稼ぎをしようと言うのか……疑問に思った俺は

『そんなことしなくても動かないぞ。
別に盗み聞きする気もないしここで逃げたらなんか男として駄目な気がする。
それに信用出来ないなら俺を捕まえとけば良いだろ？
お前らの方が力強いんだから。』

と直接的には聞かずミズハの反応で確認することにした。
するとミズハは明らかに動揺して俯きながらぶつぶつと何かを呟いて突然顔をあげると

『そ、それはお姉様にも人間を味わってもらうためでし。
決してこの前のが気持ち良くてもう一度したいなんて思ってないでしゅからね。』

とかみかみになりながら見事に暴露した。
そんな言葉を聞いて俺はミズハを無性にイジメたくなり笑いを堪えて悲しそうな表情を作ると

『俺って最低だな。無理矢理初めてを奪っておいてナナのために行動しているミズハをまた触ろうとしてた。
ミズハ、ナナのためにそんなことしなくて良いんだ。
お前は無理に俺と付き合わなくても大丈夫なんだよ。』

と渾身の演技をしながらミズハに言った。

ミズハはさらに動揺し慌てて言い訳でも考えているのか頭を抱えて数秒間固まってしまったが突然、何か良い案でも思いついたのか右の拳を左の手の平に打ち付け笑みを作ると

『お姉様の褒美がもらえると考えるだけで体が疼くです。

だからし・か・た・な・くけだものの人間にミズハのこのえっちぃ体を触らせてあげるのです。

感謝するですよ！！』

と仕方なくを強調しながら人差し指を俺に向け偉そうに言ってきた。

俺はミズハにばれないように小さく笑みを作ると目の前で偉そうにしている少女の頭をぽんぽんと軽く叩いてやり申し訳なさそうな顔を作ると

『ミズハに俺から触るのはこれで最後だ。

これからはミズハに俺からは触らない。

これは反省のためにかける俺への制限だ。

だから申し訳ないけど自分で慰めてくれ。』

と絶対ミズハが想像していなかったであろう返答をして困らせようと思って言ったのだがこれが間違いだった。

最初は案の定何とも言えない表情で固まっていたのだが急に顔を赤く染め上げ体をくねくね捩ると

『やっぱり人間は鬼畜ですね。

流石ミズハとお姉様の彼氏です。

ミズハが自分で慰める所を視姦して耳元で言葉責めをしながら焦らしに焦らして最後に美味しく食べるつもりなんですね。

分かったです。人間が望むならこのミズハ受けてたつですよ。』

かなり酷い妄言をはき本当に自分で自分を弄り始めた。

……これはどうすれば？

困らせようと思ってたのに逆にこっちが困ってしまった。

ミズハは熱っぽい瞳で俺を見つめ自分で弄りながら声をもらしているのだが……よしこれは放置だ。

ミズハはドMっぽいし別に放っておいても大丈夫、と脳内で結論がでたので実際にそれを実践することにした。

俺は一先ずミズハの放置プレイがどうのこうのという発言を全て聞き流しベッドの上に立ち上がってミズハを視界から消すとさっきから少し気になっていたナナとランの方に視線を向けた。

そこには潤んだ瞳で首を左右に振っているランとそのランを満面の笑みを浮かべながら後ろから羽交い締めにして弄っているナナがいた。

俺はいつも男っぽい口調で男らしい性格のランがそんな反応をしているのを新鮮だなぁ、と特に止めようともせずぼけ～と見ていたのだが

『おぉ主、この娘は可愛いの。

初めてが痛くないようにと思って弄っておったのに癖になってしまった。我のものにしても良いか？』

『ひぅッ、ナナ…さん？

オレ、師匠にこんなとこ見られたくな…』

『オレと言ったらお仕置きと何度言えば分かるのじゃ？
もしかしておぬしもマゾかの？
ますます欲しくなるではないか。』

と若干ナナが暴走し始めたので急いでベッドから下りてナナからランを取りあげ

『こいつがオレって言うのは癖みたいなもんなんだから許してやれ。
あとミズハがナナを待ってるみたいだから早く行って可愛がってあげろよ。』

と軽くナナを責めながらランを守るように抱き寄せミズハの所へ行くよう薦めた。

ナナは一瞬不機嫌そうに顔をしかめたがミズハに視線を移すとすぐ笑顔になり駆け足で近寄っていった。

俺はそれを見送って安堵の溜め息をついた後、腕の中にいるランに何か声をかけようとしたのだがそれを遮るように俺とランの唇が重なり合い次の瞬間にはランの舌が侵入してきた。

やはり経験が浅いからか恐る恐るといった感じでじれったいランのキスに俺は我慢できなくなり自分からも激しく絡めていくと息が続かなくなったのかランが胸板を叩いてきた。

俺はゆっくりと唇を離し真っ赤に顔を染め潤んだ瞳で俺を見ているランの口元の唾液を親指で拭ってやり微笑むと

『お前可愛いすぎ。ナナが気に入るのが分かるな。』

と頭を撫でながら言った。

いつものランならこれで恥ずかしそうにしながらも猫みたいに擦り寄ってくるのだが今回は違うようで頭を撫でている俺の手を払いのけると

『師匠、今はオレだけを見てくれ。

たとえナナさんでもオレ以外の名前なんか言ったら嫉妬しちゃうんだよ。』

と言って再び俺の首に両腕をまわして深いキスをし、意図的にかは分からないがナナには少し劣るがそれなりに大きい胸を押し付けてきた。

俺はそれを意識して少し興奮しながら口の中を掻き回しているとそっとランの手が大きくなり始めている息子に触れ唇が離れると

『なぁ師匠、師匠のでオレの初めて奪ってくれ。

師匠にならどんなに激しくされたって平気だから。』

と言いしゃがみ込むと自分であそこを広げ俺を誘うように熱っぽい視線を送ってきた。

俺はその姿に欲情し息子を完全に立たせると服を脱ぎながらゆっくりとランを押し倒しナナのおかげで十分に濡れている入り口に息子をあてがうと

『最初は痛いと思うけど我慢してくれよ。』

と声をかけ出来るだけ痛くならないようにゆっくりと中に入れていった。

少し進むと初めての証である膜に突き当たりランが怖いのか背中に腕をまわしてきたのと同時に一気にそこを突き破った。

ランは声にはださなかったが痛そうに顔を歪め歯を食いしばり俺の背中に爪をたてて痛みを堪えると息を荒げながら

『師匠、もう動いても大丈夫だ。

オレの中で気持ち良くなってくれ。』

と言い再び深いキスをしてきた。

俺はそれにこたえながら最初はゆっくり、そして徐々にスピードをあげながら腰を振るとランが唇を離し嬌声をあげ始めた。

そんなランがとても愛おしく思えランを引き起こして向き合って座ったような体制にすると下から突き上げ今度はこっちからキスをした。

激しく舌を絡めながら体を支えていない左手でランの胸を焦らすように敢えて豆に触れないよう愛撫するとランがもじもじと身を捩り始めた。俺って本当にSなんだなぁ、と内心思いつつ少しきついが中に入れたまま腰の動きを止め唇を離すと

『どうした？さっきからもじもじして、もしかして気持ち良くないか？』

と若干目が蕩けてきているランに心配しているような演技をしながら質問した。

ランは弱々しく首を横に振り恥ずかしいのか何度か躊躇って漸く

『意地悪しないでちゃんと触ってくれ。』

と小さな声で言った。

それが予想以上に可愛いかったのでもうちょっと焦らしてみようかとも思ったがランの中が初めてだからか締め付けが強くこっちが我慢できなくなりそうなので

『分かった分かった。

そのかわりにランが動いてくれないか結構疲れるんだよ。』

と交換条件をだしその間にも触れるか触れないかの微妙な所を愛撫した。

ランは我慢出来なかったのか何度も頷くと首に手をまわし早速上下動を始めた。
俺は快感から背筋にゾクゾクとしたものが走るのを感じながらランの耳元で

『良くできました。淫乱なお弟子さん。』

と囁いてから痛そうなぐらいびんびんに立っている胸の頂上にある豆におもいきり吸い付いた。
ランは一際大きな嬌声をあげ絶頂を迎えたのか体を大きく反らし痙攣するとぐったりとして俺に体を預けて荒い呼吸を繰り返した。
俺はまだ出せてないのだが仕方ないとぐったりとしているランから息子を抜き取り抱き抱えてナナとミズハが寝転がっているベッドまで運んで行きゆっくり下ろすと

『主の方も終わったのか？まぁそやつは感度が良いからすぐイッたのだろう。
その証拠に主のものはまだまだ元気そうじゃしの。

我もミズハが先にイッてしまって中途半端なのだ。
我とやってくれぬか？』

突然起き上がったナナに捕まり誘われた。
普段の俺なら全力で拒否するのだが残念ながらランが先にイッてしまったため生殺し状態。
その誘惑に勝てるわけもなくふらふらとナナに近寄り覆いかぶさると

『だんにゃ様先程から騒がしいけどもう帰ってたのかにゃ？
お風呂の準備も出来て……にゃにをしてるのにゃ！！
早くだんにゃ様からはにゃれるのにゃ！！』

奥の部屋から出て来たルビの妨害が入り行為は始まる前に終わってしまった。

歓迎という名の……（後書き）

いろいろ感想なんかあれば軽くでいいんで書いていってください。

男はつらいよ（前書き）

更新遅れてすいません。

今回も微妙な作品に仕上がってますので読んだ後感想やアドバイスなんかをお願いします。

男はつらいよ

俺達は今、本来自分の膝より少し高いくらいの身長しかないルビと目線を合わせながら説教されている。

まぁようするに俺達が正座、ルビがベッドの上に立ってがみがみと破廉恥だとかなんだかんだと言っているのだが

『なぁ主よ、抜け出して続きをせぬか？

我は主となら外でやっても良いのだぞ。』

『そ、そんなの駄目だ！！

痛いから今日は出来ないけど……明日からは毎日オレと師匠がするんだ。

だから師匠には我慢してもらう。』

『何を言ってるですか？

人間は性欲の固まりですからミズハ達三人とまとめてやっても全然平気です。

それを一人占めしようなんてゆるさねぇですよ。』

と完全にルビのことを無視して好き勝手に話していた。

ルビが気付かないくらい熱心に説教してるから良いもののばれたら
さらに説教時間が延長されるだろう。

しかしそんな俺の心配は杞憂に終わりルビが突然大きな溜め息をつくと

『まぁだんにゃ様も雄、仕方ないことだから今回のことは許しますにゃ。

これからは節度ある交際をするにゃよ。』

と言って家の奥へ入っていった。

俺は若干痺れている足を摩りながら立ち上がりかなり盛り上がっている三人に声をかけようとするとルビが奥の部屋から顔だけだし

『あ、あとにゃにやら村のみにゃさんが家の周りにいるみたいだから頑張るにゃよ。』

と嫌な予感しか生まれてこない発言をして再び部屋に戻っていった。
俺はそれを見送りながら深い溜め息をつくとさっきよりもヒートアップしている三人を軽く叩いて黙らせこれから起こるであろう惨劇にそなえて部屋に置いてある防御性能の高いグラビ装備に着替えた。
ランは何となく俺が着替えた意味を理解したのか気まずそうに見ていたがその原因を作ったとうの二人は

『ぬ～し～、さっき話し合って主とかわりばんこで寝ることになったが我慢できなくなったらいつでも我のところに来ていいからの。』

『駄目……じゃないですけどお姉様には無理です。
人間はミズハにメロメロですから。』

などと俺の足にへばり付きながら好き勝手に言っていた。
俺は二人にお仕置きとしてデコピンをくらわせ二人が額を押さえた隙に引きはがすと唯一俺の心境が分かっていそうなランに敬礼をしてからドアを開け外に出た。
その瞬間、

『総員その色欲魔を取り押さえるっす。』

というかわいらしい声と共に男共の野太い声が聞こえ次の瞬間には視界が真っ暗になった。

まぁ重たいし重たいし重たいからさっきの声の主達が俺を取り押さえているのだろうけど……誰かがめちゃくちゃ脇腹蹴ってるんだよな〜。

たまに死ね、とか何俺様よりモテてんだよ、とか聞こえてくるから犯人はだいたい分かるんだけど……

『なぁ、みんなどいてくれないか？

そこの馬鹿をぶちのめしたいんだが。』

『駄目っすね。せっかく捕まえたのを逃がす筈がないっすよ。

そこの馬鹿は後でいくらでもやらしてやるから今は殴られとけっす。』

こいつらがどいてくれるわけもなく再び殴る蹴るの暴行が始まった。

報復

意外にも暴行は数分程度で終わった。

まぁよくよく考えれば素手で別名、鎧竜と言われているグラビモスの甲殻からできた防具を殴ってるから当たり前なのだが

『それで結局どういうことなんすか？

クエスト失敗して帰ってきたと思ったら美女に美少女、さらに僕がひそかに狙ってたランちゃんまで……理由によってはもぎ取るっすよ。』

まだ危険は続きそうです。……てか

『もぎ取るって何を！？』

俺は一応予想は出来ているが思わず聞いていた。

するとこのボクッ娘レズ看板娘のスズはわざとらしい溜め息をつき軽蔑するような視線をむけてくると

『分からないっすか？僕が大嫌いな男についててさっきまでお前がランちゃんをよがらせていたナニっすよ。』

やっぱりな、そうだと思ったよ。

でもな

『お前まさかとは思うが俺の家の中覗いたりしてないよな？』

聞き捨てならん言葉が入っていたんだよ。

そしてその質問を聞いた瞬間スズはしまったという顔を作りそっぽを向いたが暫くするとこちらを向き

『それはあんな可愛い声を聞いて覗かずにいられるわけないっす。

それに僕だけじゃなくって親方とかも見ようとしてたんっすよ。

それを邪魔してあげてたんっすからご褒美ってことでおあいこっすよ。』

と自分は悪者じゃないと言って腕を組み自分を納得させるように何度も頷いていた。

俺はそんなスズにデコピンをくらわせ軽いお仕置きをすると話題を変えるため

『それよりあの馬鹿と覗きやった野郎共はどこ行った？
さっきの仕返しもかねて色々とやりたいんだが。』

と聞くとスズは潤んだ瞳で額を押さえながら俺を睨み

『はぐらかそうとしても無駄っす。
ちゃんと教えてくれないと居場所も教えないし本当にナニをもぎ取るっすよ。』

見事俺の考えを見抜いてとんでもないことを言った。

俺は内心かなり焦ったがなんとか気持ちを落ち着かせ一つ名案を思い付くとわざとらしく溜め息をついて肩に手をおき

『お前は何か勘違いしてないか？

俺がいないってことは家に簡単に入れるってことだ。

ランは無理だけど他の二人は元レズと両方いけるやつだからな。

ここまで言えば分かるだろ？』

すまんナナ、ミズハ俺はお前達をだしに使う。

スズは俺の思った通り涙を拭き取って満面の笑みを作ると

『レオは逃げるために沼地にゲリョスを狩りに行ったっす。

他の馬鹿は坑道に逃げて行ったっすから何でもしていいっすよ。』

と俺が望んでいた情報を伝えさっさと家に入っていった。

しかしなぁ、レオが逃げたかぁ。

一番楽しみにしてたのに……あっそっかこれは天が最後の楽しみにとっとけってことだな。

よし、それならレオは明日追っかけにいくとして一先ず逃げ切れなかった馬鹿共を虐めるとするか。

確か坑道だったよな……まぁあれが妥当か。

俺は直ぐさま調合屋へ行き

『じいさん、ちょっと急ぎの用があるんだが……』

その数分後に完成した物を持って坑道に向かった。

すぐ近くなのでものの数秒でつき、坑道の出入口に仁王立ちして大きく息を吸うと

『ピッケルグレート持って来たぞぉ。』

と坑道の奥まで聞こえるよう大声で叫んだ。

するとその直後軽い地響きをおこし雄叫びをあげながら発掘アニアこと、テツが飛び出してきて俺が持っているピッケルグレートに向かって突っ込んできた。

前以て予測できていたので俺は素早くピッケルグレートを上にあげて躱し、それと同時に足払いをしてテツを倒すと

『中に馬鹿がいっぱいいるだろ。そいつら連れてこい。

もし出来たらピッケルグレートをいくらでも持って来てやる。』

とテツに交換条件をだした。

するとこの三度の飯より発掘好きと豪語している男は何度も頷くと

『おっしゃ、そしたらワイが殴ったのも許してくれるんやな。

任しとき、すぐ連れてきちてやる。』

と言って坑道の中に入っていった。

いや～まさかだな。俺はてっきりテツは参加してないと思っていた

のだが……無性にいらついたからまとめてやるか。
スズが言った通りみんな中にいるのが分かったので、俺はポーチの中からついさっき調合屋のじいちゃんに作って貰った秘密兵器、こやし玉を取り出すと

『許すわけねぇだろうが！！』

と坑道の奥にも聞こえるよう叫んで立て続けにこやし玉を五つ全力で投げこんだ。
それから数秒すると中から男達の悲鳴が聞こえ、さらに数秒経つとその声の主達が悪臭とともに溢れ出してきた。
俺はさらにもう一つ男達が立ち止まって深呼吸している所にこやし玉を投げ付けとどめをさし

『もうあんな行動するなよ。
お前ら結構顔は良いんだから出会いがあればいつでも彼女はできるって……親方は無理だけど。』

と慰めの言葉をかけた後（親方を除く）仕上げに八箇所に重りをつけたネットを被せて動きを制限し家へと向かった。

そして今度も数秒でついたのだが家の中からはあま～い声。
俺の家だから普通に入っても悪くはない筈なのだが男嫌いのスズのことだ、そんなとこ見たら……その……もぎ取られちまう。
仕方ないと俺は溜め息をついて家に入らず工房に向かうと

『ばあさんバルバロイブレイドを強化してクリムゾンゴート作ってくれ。
金と材料はいつもどおり家からとってくれれば良い。
ただその時中にいるやつらに俺は沼地に行ったって伝えてくれよ。』

と口早に用件を伝えてから返事も聞かず酒場に走っていった。
もちろんのことスズはいないので掲示板から沼地でのフルフルの狩猟依頼を見つけると勝手にはんこを押して受注したことにして雑貨屋に向かいホットドリンクと砥石を買って工房に向かった。
工房ではばあさんが若干臭う弟子達を説教していたので若干行きずらかったが説教から逃れるチャンスだと思ったのか

『師匠、師匠シンさんが取りにきてますよ。』

と喜色を隠そうともせずに言った。

おかげで気付いてもらえたのだが……名前で呼ばれるのが久しぶりのような気がする。

そんなどうでもいいことを思っているとばあさんに

『ほれ、頼まれとったもんじゃ。

言っとくが切れ味悪いから気をつけるんだよ。』

と言いながらクリムゾンゴートを手渡され再び説教に戻っていった。

俺はその後ろ姿を見て苦笑いしながらも感謝の言葉を述べると狩りに行くため村をでていった。

報復（後書き）

漸くシンがハンターの仕事に向かいました（―・―；）

感想に書いてあったので次は頑張って戦闘をいれてみたいと思います。

引き続き感想、アドバイス待っているのでお願いします

不幸だ（前書き）

更新遅れてすいません。

内容も無茶苦茶な駄文ですがよろしくお願いします。

後書きでミニコーナーみたいな感じのをやろうかなぁとか思ってますのでそちらも楽しんでもらえたら嬉しいです。

不幸だ

太陽が真上で冷えた大地を暖めている昼頃、俺は竜車と言われているアプトノスが引く車に揺られながら沼地に向かっていた。

村から沼地まではまる三日は掛かるが今日はその三日目だ。

これまでの時間にクリムゾンゴートの研磨や荷物の整理等をすましてしまい後はもう、目の前に見える沼地に辿り着くだけなのだが、突然これまで快調に進んでいた竜車が止まりアプトノスが小刻みに震え始めた。

俺は前にも同じような事があったので溜め息をつくと必要な荷物を取り出し竜車から下りてアプトノスの腹を蹴って逃がすと

『1、2、3、4、5……ざっと10匹か。

まぁ肩慣らしの相手にはなるな。』

この無駄な労働を合理的だと自分に言い聞かせるために目の前から来ている赤い集団を見て呟き背中にあるクリムゾンゴートに手をかけると走り出した。

赤い集団の正体はイーオス。

こいつらはランポス同様集団で狩りを行うのだが、厄介なことに体内にある毒袋で出血毒を分泌し、それを負傷した獲物にかけることで相手を弱らせ、逃げたとしても地面に付着した血を追って執拗なまでに追跡してくる結構危険なモンスターだ。

そのせいでなめてかかった新米ハンターが命を落とすことも少なくない。

ちなみに俺は慣れ始めた頃に二度死にかけたが……。

まぁそれは一先ずおいといて、いつの間にか間合いに入っていたイーオスに大剣を扱う中で比較的攻撃の速度が速い抜刀斬りを放った。

速いとはいっても大剣が重いこともあり初速は遅いので簡単に横に跳ぶことで躱されてしまうが、予想できていたことなのでもう一歩踏み込むと腰を捻ってイーオスの後を追うように大剣を横に振るった。

イーオスも流石にこれは避けられなかったようで首に当たると爆音とともに吹き飛びその直後、耳障りな鳴き声が背後と左右から聞こえ反射的に前に飛び出すと地面をえぐる音が微かに聞こえた。

俺は鳴かなければ鎧に傷くらいつけれただろうに、とイーオスの知能の低さを嘲笑いながら振り返る勢いそのままに大剣を背後にいるイーオスにフルスイングして3匹殴り飛ばした。

切り裂いたじゃないのは工房のばあさんが言った通り切れ味が皆無だからだ。

一応火属性がついてるおかげでそれなりの威力があるから結構なダ

メージを与えられた筈なんだが……

『なんでそんなに元気なんだよ。』

残り6匹かと思いきやさっき殴り飛ばした3匹は既に復活していて最初の1匹しか仕留めれてなかったようだ。

俺の愛用しているモノブロスSの装備なら辛うじて逃げられる可能性があるのだがいかんせん今日はグラビモス装備。

防御を重視したがためにその重量と可動域が狭く走るのも一苦労で到底逃げることなど出来ないのだ。

仕方ない、と溜め息をついて大剣を構えた瞬間にそれは起こった。

突然イーオスが上空を見上げたと思ったら一斉に逃げ出してしまったのだ。

俺は軽く混乱しながらもこの状況を理解するためイーオスと同様に上空を見上げ、それと同時に日の光を遮ったそれのシルエットに

『なんで炎王龍が此処に来るんだよ！！』

と反射的に叫んでから沼地とは逆方向に走って逃げた。

勝てるわけがないのだ。

愛刀のブラッシュデイムでさえ弾くほどの甲殻をどうやって初めて使う切れ味皆無のクリムゾンゴートでダメージを与えろと？

そもそもティオの討伐の時に愛用している装備で行ったのにも関わらず回復薬１０個＋秘薬を１個使ってやっとの勝利。

それほど古龍の討伐、又は撃退は大変なのに今の俺の持ち物はホットドリンク２個と砥石４個……うん、戦えば確実に死ぬな。

それに俺はとことんついてないのであろうか？

心なしか影が俺の後を追ってきながら大きくなっているように見えるのだが。

まぁ叫んだからな。気付かれて当たり前っちゃあ当たり前なんだが……こんなので死にたくないよな。

仕返しと時間つぶしのために沼地へ向かってその途中に炎王龍に襲われて死亡って。

でも抵抗したいけどもう駄目だな。村のみんなやナナとミズハとランを残して死ぬのはやだけど既に風圧で動けなくなってるし熱風も感じる。

レオにもティオにも仕返し出来な……ティオ？

そうだティオなら助かる。

そう思った俺は

『ティオ俺だ！！ちょっと待てよ。今防具外すから。』

と目の前のティオ（仮）に必死に言いながらヘルムを大急ぎで外した。

そして目の前のティオ（仮）に目を向けると熱風がすぐに収まり目が眩むような光が発されたと思った瞬間

『俺をたずげてくれぇ～。』

涙で顔がぐちゃぐちゃになった赤い長髪のイケメンだったもの、ティオが飛び込んできて、拳が顔面に向かってきた。

俺は突然の顔面へのパンチに避ける余裕もなく、気が緩んでいたこともありそれがヒットすると力無く崩れ落ち意識を失った。

不幸だ（後書き）

～俺の彼女は古龍達～ミニコーナー

ナナ　「さて主よ。作者とやらが急にこんなことを始めたがいったい何をするのじゃ？」

シン　「ん？俺も特には何も聞いてないから適当でいいだろ。」

ミズハ　「それじゃあミズハは人間といちゃつくです。」

ラン　「あっ駄目だぞ。師匠はオレのだ。」

ナナ　「何を言っておる。主はみなのものであろ。」

シン　「おいおいものって、俺にも人権ってもんが……ちょッ！！ナナやめろそこ触るな。おいミズハもやめ、んむッ！！」

ティオ　「……え～なんかお楽しみを始めてしまったみたいなので報告は俺がします。まず、」

スズ　「あっ何やってるっすか！？僕にも一人貸すっす。」

ティオ　「……ゴホンッ。え～まず初めに更新遅れてすみません。さらに駄文すみません。

そんでもって次回予告なんですが」

シン　「おい、それは主役の俺が……」

ナナ　「駄目じゃ。おい下僕続けておれ。んッ」

ティオ　「え～と次回は新キャラが出る予定です。ついでに俺の涙のわけも……お楽しみに！！」

落下と遭遇（前書き）

文字数かせぎの文があります。

いつも以上に読みにくいかもしれないですが今後ともよろしくお願いします。

落下と遭遇

俺の意識が目覚め始めて最初に認識したこと、それは眩しい日の光でもティオに殴られた痛みでもない。

ただただ強烈な

『寒ッ！！』

凍てつくような寒さだった。

そして未だ覚醒してない身体はこの寒さを認識した瞬間には勝手に動き下に広がる真っ赤な暖房器具、ティオにしがみついていた。

それでも続く寒さによる震えに自分の腰の辺りからカチャカチャという音が鳴ると、普段は働きの悪い頭が自分の命を守るためその音の正体を瞬時に記憶から引き摺り出しそれをすぐ飲めと命令を下して、そのとおりに動いた身体が音の正体、ホットドリンクを口に流し込んだ。

正直な話俺はこのホットドリンクが好きじゃない。

まぁその理由は色々あるのだが、強いてあげるなら身体を暖めることを重視したためにクソ不味いのと、それを作る製造工程を見てしまったことであろう。

口の中を一瞬で満たす酸味と苦味……の直後に襲い掛かる痛いと言

った方が似合うような辛味。

まぁそれは1分程で鎮まってくれるのであまり問題ないのだが、多分こっちが俺のホットドリンクが苦手な理由、すなわち製造工程なのだがとにかくキモい。

それを見た時は作ってたハンターに恐れを抱いたね。

まず手始めに調合の材料である、とうがらしとにが虫(カメムシみたいなやつ)を適当な鉄製の器に入れる。

後はそれに細かい薬品なんかを入れ最後に水をほんのちょっと入れて数分待つだけなのだが、その数分の間の器の中がヤバいのだ。

まずとうがらしが瞬く間に液体へと姿を変え器の底を赤く染める。

そこまでは特にキモい要素もなく興味津々だった俺はそこからどうなるか楽しみにしていたのだがその数秒後にそれはおこった。

今まで元気に器の底を走ってたにが虫が突然止まってキーキーと鳴き声をあげ始めたのでよく見てみると足が溶けて三分の一ぐらいになっていたのだ。

しかも足がみるみるとけていきついに下腹部が溶けだした瞬間、緑色のどろっとした液体を吐き出し、逃げようとしたのか羽を広げた数瞬後、今度は黄色っぽい液体を滲ませながら赤い液体に沈んでいったのだ。

その映像が脳裏にこびりついてその時はホットドリンクを飲めなかったがそのせいで凍え死にそうになったので今は辛うじて飲めるよ

うになっている。

まぁそれはおいといて身体も暖まったことだし

『なぁティオさんよ。

お前は俺を拉致して何処へ連れていくきだ？

たしか意識が無くなる前に助けてくれとか言ってた筈だが。』

この状況を作り出したやつに聞いてみるか。

ティオは首を動かして背中に乗っている俺の方を見てもう起きたか、

と呟くと諦めたかのようにため息をついて

『雪山にいるある人に男を連れて来るようにって頼まれただけだ。

本当はあと何回も同じことをしなきゃいけないんだがお前を連れて

いけばたぶんそれもしなくてすむんだよ』

と意外にあっさりと説明して視線を前に向けると飛ぶことに専念し

たのかこっちを向くことなく飛び始めた。

俺はティオの説明にふ～んと適当に反応しながらティオの頭の方に

移動し角を掴んでたてがみに顔を埋めるとふとティオがナナの姉上

なる人物の所にいたことを思いだし

『ある人ってもしかしてナナが姉上とか言ってた人か？』

と質問というより確認をしてみるとティオが姉上という単語にあからさまにビクッと反応した後

『しょうがねぇだろ。こうでもしねぇと逃げらんねぇんだから。』

と自供して飛ぶ速度をさらにあげた。

待てよ……ということはこいつは姉上なる人物から逃げるため俺を生け贄に捧げようとしてんだよな。

『いてッお前何すんだよ。』

『何って下僕からたてがみ毟って鱗剥いでるだけだが。』

『毟るな剥ぐな！！それに下僕って俺達親友だろ？』

『下僕よ。俺もついさっきまではそう思って殴ってきたのも許していたんだが、お前が先に信用を……あっ。』

その考えにいたると俺はティオと口論しながら怒りにまかせて剥ぎ取りナイフも使わず素材を採取していたのだがティオが暴れたせい

で角から手が離れ……背を下にして落ちました。

やばいなこれ、流石に死ぬかも。

俺は重力によってかなりの速さで落下しながら再びそんなことを考えていた。

ティオは俺が落ちたのに気が付いたのか何やら叫んでいたが雪山の、しかも寒冷期の天候は悪く。

かなり吹雪いていたので既にその姿を確認出来ず奇跡でも起きない限り助からないことは明らかだ。

俺は本日2度目の死を覚悟しその内くるであろう衝撃に備え目を閉じ歯をくいしばると重力に身を任せた。

任せたのだが数秒後、突然落下ではなく浮かぶような感覚にみまわれ

ポスッ

というなんとも気の抜けたそんな音をだしながら着地。

理解出来ず、頭に疑問符を盛大に浮かべながら起き上がると、少し離れた所に子供と思われる人影を発見したので近づいていき

『俺何で生きてんの？』

目の前にいる茶色い防具と同色のヘビーボウガンを装備した少女に質問した。

普通なら分かる筈がないのだがこの少女の装備、確かクシャルダオラのガンナー専用の防具とこれまたクシャルダオラの素材をふんだんに使って作られたデルフ＝ダオラとかいうヘビーボウガン。

これらの素材であるクシャルダオラは風翔龍とも呼ばれ、風を操り天候さえも変えてしまう程、強力な古龍なのだ。

それをこのミズハより１０？近く小さい少女が装備している。

つまりそれだけのクシャルダオラを狩っているというのだ。

しかし、その可能性は低い。

そもそも古龍は半年に一回現れるか現れないか。

その程度の確率だからこの少女の見た目、およそ１２才では到底無理なのだ。

そこで俺は考えた、というより閃いてしまった。

それも自分の思考回路を疑ってしまうような

『もしかしてだが……君はクシャルダオラか？』

なんていう考えを。

『……。』

『……。』

まぁ予想通り沈黙だけどさ。

やめてくれないかな、その無表情で冷めた感じの目。

確かに聞く限りでは痛い子だけど俺にだってその根拠くらいあるんだぞ。

まず第一にさっき言った装備のことだが、もしこの子が古龍なら、ティオによると古龍は脱皮して大きくなって、しかも薄皮じゃなくごっそりと甲殻ごと脱ぐから装備の素材を十分確保できるらしいのでこの少女が装備をしていてもおかしくない。

第二にかなりの高さから落ちた筈の俺を助けたのが風だから。

あの時感じた浮遊感は例えるなら風に包まれたような感じだった。

そしてその風を操ることができる古龍がクシャルダオラであり、この寒冷期の雪山に何故かクシャルダオラの防具と武器を装備した少

女が目の前にいる。

これを疑わずしてなんとする。

と軽く現実逃避しながら理由を説明したのだが相変わらず無表情のまま冷めた感じの目でじっと俺の防具で隠れた顔を見続ける少女。

あっヤバい、目から汗が……出てきて凍った。

えっ何コレ？

右目が開かないし冷たい。

開けようとしたら無茶苦茶痛いし左目もなんか凍ってるような。

『何で……分かったの？』

そしてここにきて少女のいきなりの返事。

どうやら少女は驚いて固まっていたらしい。

良かった。この子に痛い子と認識されてなかった。

いや～本当に良かった。

『説明は後でするから住みかに連れてってくんない？』

我が目の終了をお知らせします。

落下と遭遇（後書き）

～俺の彼女は古龍達～ミニコーナー

ナナ『のぉ～ぬしぃ～。』

シン『なんだ、甘えたみたいな声だして？

因みにもう一度とか言われてもしないぞ。』

ナナ『むぅ、ミズハとランも疲れて寝たからいけると思ったのじゃが……やはり駄目か。』

シン『当たり前だ。何回やったと思ってんだよ。

それより作者から何か伝言あるんだろ？

それを先にしろよ。』

ナナ『……了解じゃ。

先ずかような駄作を読んでいただき感謝する。

我としては、もっと主と文字通り絡み合いたいのだが、何やら事情があるようでそのようなシーンはほとんど描写出来ないそうだ。

期待していた読者には誠に申し訳ないと思っておる。

引き続き応援してくれ。だそうだ。』

シン『おぉそうだったか、それは残念だ。（棒読み）』

ナナ『主、何やら嬉しそうだが描写されないだけで我は毎日主を狙っているぞ。』

シン『いや、嬉しそうになんかしてないって。

だから立ち上がるな、こっちくるな！！』

ナナ『ふふっ、こんなに元気にして何を言う。

まだまだ夜は長いからの。』

俺……ロリコンじゃないよな？（前書き）

今回もいつも通りの駄文ですが引き続き応援やらなんやらお願いします。

俺……ロリコンじゃないよな？

『いや～助かった。

ありがとうな、クーちゃん。』

『別に……構わない。

それより……ちゃん付け……やめて。』

あの後、俺は真っ暗な視界の中、目の前に座っているクシャルダオラから人になった幼女、クーに手をひかれ、意外と近くにあった洞窟に向かい、そこで起こした火で目の周りの氷を溶かしてから適当に会話している。

そしてこの数分間一緒にいて気づいたことなのだが、どうにもこの娘は無口・無表情が基本らしい。

さっきみたいに驚いた時と必要な時以外は頷くか、その蒼い澄んだ瞳でじっと見つめてくるのみで何を考えているのか全くと言っていいほど分からない。

現に今も全くの無表情で

『発情した。

慰めてほしい。』

と言って足元から防具を外し始めているのだから。

まぁ大丈夫だけどさ。

ここ寒いし、幼女だし、幼女だし、幼女だし。

えっ？ミズハ？

え～と、あいつはあれだよあれ。

ナナに俺の鋼（？）の理性が砕かれた時に自分で慰めてたのがいけないんだ。

てゆうかミズハは幼女じゃない。

あれは……そう、発育がいまいちな女性だよ。

うん、そうしよう。

そうしないと俺がそうゆう人の仲間になってしまう。

とか頭の中で悶々と考えている内に、クーはどうやら防具を外し終わったようでこちらに来るなり俺の防具に手をかけた。

『……ていッ！！』

『あうっ！！』

もちろんチョップで阻止するけどな。

あ〜でも、これは失敗だったかもしれない。

何故ならクーの今の表情があまりにも可愛いからだ。

頭を押さえ興奮しているからか若干赤く染めた頬に潤んだ瞳でじっと俺を見上げているクー。

その表情に無性に頭を撫でてやりたい衝動が沸いてきて葛藤の末、右手を動かそうとした瞬間、

『……いたい。』

と頬を膨らましたクーから抗議の言葉が聞こえてきた。

『えっと……すまん。』

『クー……命の恩人。』

『はい、ごもっともでございます。』

『じゃあ……体貸す。』

『それは無理だ。』

『何故？』

『寒いし、ロリコッ……可愛い娘を壊したくないから。』

『……壊れそうなぐらいが……好き。』

『……。』

『……。』

……どうする、どうする、どうする、どうする、どうする？

なんかどんどん追い詰められてるし、ロリコンって言いかけた時の殺気がハンパないし、最後の言葉で本当にめちゃくちゃにしたいと俺の欲望が軽く暴れだしている。

これは理性崩壊まで時間の問題だ。

いや、待て待て頭を冷やすんだ俺。

さっき言ってたのはただの戯れ言なのか？違うだろ。

どっちかというと俺はこの幼女にしっかりとそうゆうことは駄目だと説明しなければいけない立場の筈だ。

そうだ、そうだよ。俺はこの無駄に力の強い幼女をしっかり調きょッ……いかんいかん理性が負けかけた。

教育してやらないとこの娘の今後のためにならない。
俺は装備を外そうと必死に手を伸ばしているクーの肩を掴んでから
しゃがんで目線を合わせると

『なぁ、クーよ。

俺だから良かったものの他の人なら襲われるぞ。

お前は可愛いんだからそれくらい自覚しろ。』

と軽く説教した。

するとクーも分かってくれたのかこくん、と頷いて伸ばしていた手
を下ろし

『わかった。』

とじっと俺の顔を見たまま返事してくれたので、俺は安心してため
息をつくと、肩から手を放し

『えいッ。』

押し倒された。

え～と、とりあえず

『あの～クーさん？』

と質問してみると、クーは俺を上目遣いで見たまま

『静かに……帰ってくる。』

とだけ言って上体を起こし、俺に跨がった。

もちろん俺の頭の上には疑問符まみれ。

分からないので何が帰ってくるのか聞こうとすると、無言のまま顔が近づいてきて唇と唇が重なった。

急な事態に頭を混乱させていると、生暖かい液体が流れ込んできて反射的に飲み込むと、クーは満足そうに顔を離し

『追い払ってくる。』

と言って脱いでいた装備を手早く身に付け外に出ていった。

俺はそれを唖然としながら見送り暫くして立ち直ると静かにガッツ

ポーズを作った。

これでロリコンの汚名をうけずにすむ……と。

だが、俺の考えは甘かった。

突如として身体中、特に下半身が熱くなり息子が元気一杯起立したのだ。

そして俺はこの現象を過去に何度か経験したことがある。

俺の師匠こと痴女に盛られた媚薬の中でもベスト１０に入る威力を持った代物で、俺の初めてを奪うために使われた物でもある。

あの時は原液で飲まされたから症状が2、3日続いてその間中ベッドから下りなかったのを覚えている。

しかし、この薬は師匠お手製の物だった筈なんだが……まぁいい、この薬の効果がきれてからクーにでも聞けば分かることだろう。

問題はこの雪山の猛吹雪の中どうやってクーに遭遇せず薬のきれる約2時間を逃げ切るかだ。

会えばかなりの確率で襲うからな、ロリコンにならないためにも逃げなくてわ。

急いで立ち上がると

『終わった。

続き……しよ？』

と言うクーの声が洞窟に響き……俺の理性も終わりました。

俺……ロリコンじゃないよな？（後書き）

～俺の彼女は古龍達～ミニコーナー

ラン『ロリコンだな。』

スズ『ロリコンっすね。』

ルビ『ロリコンだにゃ。』

シン『もうやめてくれ。』

スズ『えっ何故っすか！？

僕達はきわめて当たり前のことを言っただけっすけど。』

シン『……仕方ないだろ。

薬盛られた上に可愛い娘に迫られたら我慢できないって。』

スズ『そうっすか……ささ、ランちゃんこれを飲むっすよ。』

ラン『いや、今の流れからしてそれ媚薬だろ。

オレは絶た――んッ。』

スズ『ふふっ、それじゃあランちゃん。

行くっすよ、二人の愛の巣へ。』

ラン『（コクリ）』

シン『あいつ原液飲ませやがったな。

ルビ、さっさと作者の伝言伝えて救出するぞ。』

ルビ『はいにゃ！！

えっと……どうやら次回作の構成は全くうかんでにゃいみたいにゃ。

だから更新が遅くにゃるかもだにゃ。』

シン『相変わらず無計画なんだな。

まぁいい、それで他にもなんかあるか？』

ルビ『はいにゃ。

どうやら作者は読者のみにゃ様にこの作品の略称を募集するらしいにゃ。』

シン『作者もそんくらい自分で考えろよ。

それよりさっさと救出行くぞ。』

ルビ『分かったにゃ。』

作『お、応募してくれないと更新しないんだからね！！』

シン『……何かとてつもなくイラッとしたんだが？』

葛藤とお仕置き（前書き）

最近出番がないんで今回は【ナナ視点】で書きました。

いつも以上に駄文＋話しの流れめちゃくちゃですが今後もよろしくお願いします。

葛藤とお仕置き

突然、主がクエストに出ていった、と工房のおばあ様が伝言しに来た。

我はその時、ミズハやスズとの第3ラウンドを終え、どうやってランを仲間に入れようかと相談していたのだが、あまりのショックに思考が止まってしまった。

我はいつでも主と一緒に居たいというのに、主は我に一言も言わず仕事に行ったのだ、と。

その間はおばあ様が部屋のボックスから金や素材をあさっていたのも気にならない程、唖然としていたのだが

『お前さん達、昼間っからそげなことばかりしとったらシンに捨てられるぞ。』

と言っておばあ様が出ていった。

その瞬間、我の頭の中にそのシーンが何度も再生され始め、そのあまりにもあり得てしまいそうな光景に頭を抱え仰向けに倒れこんだ。

元々、主と繋がったのだって我が襲って無理矢理だった気がする。

いや、気がするではなく実際にそうじゃった。

それで、主に返り討ちにされて……惚れ直したんじゃ。

それに実際の所ティオがやられたことなど関係なしで、我が主の闘う姿に一目惚れしたのじゃし、この短い期間でも十分に知ることができた優しい所も大好きじゃ。

だからこそ一緒にいたいのじゃが……主はやはり迷惑に思っとるのじゃろうか……。

我がそんなマイナス思考にとらわれていると、くりくりとした目に紫の髪の少女の顔で視界がふさがり

『お姉様どうかしたですか？

もし悩み事があるならミズハをいじめて発散するですよ。』

その少女、ミズハの発言に思わず笑みがこぼれた。

我はミズハの少し癖のある髪を手櫛でとくように撫でると触れあうだけのキスをして

『心配には及ばぬ。

少し主のことで悩んでおっただけじゃ。』

と言いミズハを抱き上げ、横に下ろすと体を起こし背伸びした。

その時ミズハが少し物欲しそうな顔をしていたが、我はなんとか性欲を抑え込み、椅子に腰掛け股を押さえて悶えているランの所に行くと

『ランよ、主は我のことが嫌いなのか？』

今最も聞きたいことを主との付き合いが長いであろうランに聞いた。

ランは股を押さえながら首を傾げ、顎に人指し指を当て少し考える素振りを見せると

『師匠じゃないんだから、そんなのオレには分かりませんけど、確実に言えることは、師匠がナナさんのことを嫌いじゃないってことですね。

師匠、結構モテるんですけど関係持った人なんてナナさん達を除いて2人しか知らないですから。』

と若干の罪悪感を感じてしまう答えが返ってきた。

まぁそこで実は我から襲ったなどと言える筈もなく、曖昧に返事をすると

『ちなみにその2人というのは誰じゃ？』

気になった言葉を聞いてみた。
我はもちろんすぐに答えを聞けると思っていたのじゃが、ランは急に意地の悪い笑みを浮かべ

『そうですね～。教えてあげても良いんですけど、これは師匠の秘密ですからね。
オレにだけリスクがあるのは卑怯だと思うんですよ。』

と意味深な事を言いその笑みを深めた。
我は暫くその意味を考えたがやはり分かる筈もなく、仕方なく聞こうとすると

『ランちゃんも意地悪っすね。
僕もシンの秘密は興味あるんすけど何が条件っすか？』

この村の看板娘でレズのスズが我より先に質問した。
思わずむすっとした顔をしてしまったが、我も聞きたいことだったので黙って答えを待っていると、ランはスズの方に微笑みかけた後、我の方に勝ち誇った顔を向け

『スズさんは今度ご飯でも奢ってくれれば良いですよ。
ただ、ナナさん……あっあとミズハちゃんも聞きたいなら、師匠と寝る日をオレに譲ってくれれば言ってあげますよ。』

何とも卑劣な条件を提示した。
確かに主の秘密は聞きたいが、我だって主と一緒に寝て、あわよくばあんなことやこんなことをずっとやっておりたい。
でもそれじゃと過去を知っておるランに彼女、いや将来の嫁として負けているような……。
そんな感じで我が再び頭を抱え悩んでおると

『ミズハは人間の秘密なんて興味ないです。
人間が今の人間だからミズハは好きになったですよ。』

ミズハが我の心をこう……なんというか、ずきゅーんという感じに貫く言葉を発した。
そうじゃ、そうなのじゃ。
我は主が好きなのであって主の過去などどうでも……いや待てよ。

今の主があるのは過去の主があるからであって、えっとそれはつまり過去の主も大切ってことなのでは……あぁ～もうよい

『我も主の秘密など聞かぬ。

ランに主が話したのなら我にもいつか言ってくれるだろうからな。』

少し負け惜しみを言っているようだがこれが一番だろう。

案の定ランも悔しげな顔をしておるし成果は上々じゃ。

あとは主とどうやって一緒に過ごすかなのじゃが……

『まぁいっか、オレは師匠と一緒に狩りにいけば――『それじゃ～～！！』――うおっ、急にどうしたんですか！？』

我が叫んだ事にランが驚いておるがそんなのはどうでもよい。

『我は決めたぞ。主とずっと一緒にいるためにハンターになる！！』

我は決意した事を村中に聞こえるほどの声で宣言した。

そしてその数瞬後

『僕のナナさんとの時間がぁ〜〜。』

『師匠とオレだけの時間がぁ〜〜。』

『流石お姉様です。ミズハも一緒にハンターになるです。』

2人の絶望に満ちた声と1人の嬉々とした声が部屋中に響き渡った。

我はその中の1人、ランに仕返しとばかりに勝ち誇った笑みをむけてやると、ランは俯いていた顔を勢いよく上げ

『そうは言ってもハンターには簡単になれるもんじゃないんですよ。養成所を卒業するか、ハンターの弟子になって許しを得ないとギルドで認めてもらえないんですから。』

精一杯の抗議なのじゃろう、ビシッと効果音がつきそうな感じで我を指差し声を張り上げた。

ランの隣でスズも激しく頷く所を見ると本当なのじゃろうが、何か勘違いしておるの。

『我が誰の弟子にもなってないと思うたか？』

そう、我にも師匠はいるのじゃ。
我に性の喜びを教え、言葉を教え、常識を教え、ついでに人の姿での戦闘を教えてくれた恩人。

『我の、いや、我達古龍の師匠はドンドルマの英雄、カスミじゃ。』

瞬間ランの絶叫が響き渡った。

まぁこの反応は当たり前じゃ。

カスミはドンドルマに向かった下僕やクー、挙げ句の果てには山のような古龍、ラオシャンロンも、多くのハンターが死ぬか逃げるかしている中、奮闘して撃退した3人パーティーの1人じゃからな。

我が自慢気に胸を張りながらそんなことを回想していると、何故か絶叫しなかったスズが

『英雄なんて嘘っすよ。

あの人の話しのほとんどが嘘っぱちだってギルドマスターが言ってたっすから。

実際はギルドナイトと近衛隊の人達が撃退したんすよ。』

冷めた目で我の発言を全否定した。

これには流石の我も怒りというものが込み上げてきたが、　まぁ大人の女として　ここで怒鳴るのもあれなので、息を深く吸い気持ちを落ち着かせると

『ギルドナイトに近衛隊？

冗談が過ぎるぞ、スズ。

大臣共が自分の窮地でもないのにそんな精鋭部隊を使うわけがなかろう。

やるとしても岩を落とすかバリスタや大砲、撃龍槍で地面に這いつくばって必死に戦うハンターごと始末しようとするだけじゃろうが。

実際カスミとその仲間も、英雄という称号の変わりに多額の口止め料をもらったと言っておったわ。』

と冷静に、あくまで冷静に反論した。

それにランだってカスミの名を知っておるのじゃ。

ほとんどのハンターはスズのような言い分などギルド側の醜い悪あがきに過ぎないことを理解している。

面と向かって言わないのは下手に逆らうとギルドの連中が無実の罪でハンターを投獄したりするからじゃ。

現にこんな小さな村の酒場でクエストの受注をしているスズでさえ、

ほぼ洗脳に近いことをされてギルド至上主義になっているのだ。
都市などに行けばこれ以上のやつが何人いることか……考えるだけでゾッとする。
そこまで考えた我は辺りを見回す。
ミズハとランはそこら辺の情報には疎いのじゃろう、スズの豹変ぶりに驚いている。
まぁこの状態の人間は扱い易いので

『ラン、今日明日はルビを適当に連れ出しておいてくれ。
ミズハは我を手伝うのじゃ。
スズを手っ取り早く助けるぞ。』

簡潔に指示を与え、頭でほとんど理解出来てないまま行動したランがルビを連れ出すのを確認すると我はスズをベッドに押し倒した。
いくらそういう教育を受けたとはいえ、我の師匠を嘘つきと馬鹿にしたのだ。
それ相応のお仕置きをせねばなるまい。
それに我は今のスズのように抵抗してくる者を屈伏させるのも大好きじゃからな。

いつまでその目が続けられることか……今夜は眠れそうにないの。

葛藤とお仕置き（後書き）

～俺の彼女は古龍達～ミニコーナー

ルビ『だんにゃさまぁ～～。』

シン『うおっ、泣きそうな顔してどうしたんだルビ？

イジメられたか、怖い夢でも見たか？』

ルビ『ぐすっうぅ、そうだにゃ。

作者にイジメられてるにゃ。』

シン『何！？作者の奴、俺をロリコンにするだけじゃあきたらず、

ルビにまで手を出したか。

それで何されたんだ？今無性に人を殴りたいんだが。』

ルビ『出番がすくにゃいのにゃ。』

シン『……』

ルビ『……だんにゃさま？』

シン『……作者の所行ってくる。』

タッタッタッタ

……数分後……

タッタッタッタ

シン『ただいま。』

ルビ『あっだんにゃさま、どうにゃったんだにゃ？』

シン『んっ一応出させてもらえるらしいけど、条件があるらしい。』

ルビ『……条件かにゃ？』

シン『うん、1日中もふもふさせろだって。』

ルビ『……嫌だにゃ。』

シン『だよな。よし、今度は一緒に行くか。』

ルビ『はいだにゃ。』

タッタッタッタ

ティオ『漸くどっかに行ったな。』

レオ『あぁやっと俺様達の出番だ。』

ティオ『お前あの黒猫より出番ないよな。』

レオ『仕方ないさ。作者にこの俺様を上手く描写できる力などないからな。』

ティオ『……めでたい頭だな。

まぁそれより伝言だ。』

レオ『了解。

えぇキャラがかなり増えたので、キャラの説明がいるという方は感想にお願いします、だそうだ。』

ティオ『ほとんど容姿なんか描写されなかったからな。』

レオ『まぁそういうことだ。

それでは読者の皆様方、今後ともこの駄目作者を――』

テ・レ『――よろしくお願いします。』

帰宅（前書き）

遅れてすみません。

今回も短い&駄文です。

帰宅

１０日ぶりの我が家。

ただ出ていった時と違うのは俺の後ろに無口無表情の少女がいることだ。

結局この少女、クーに捕まってしまったせいで雪山から出ていくのに2日もかかってしまい、予定日より3日も遅れてしまった。

そんなわけで俺はナナ達が心配してくれてるかな～、なんて思いながら。

そしてそんなことを考える自分に苦笑しながら家の戸を開け

『ぬし～会いたかったのじゃ～。』

『うごッ！！』

青い物体の突撃に堪えきれず仰向けに倒れた。

痛みに耐えながら目だけを動かしてクーが無事に俺の後ろから避難しているのを確認すると、青い物体改めナナの肩を押して引き剥がし

『遅くなってごめんな。

ちょっとお前の知り合いに捕まってな。』

と謝った後遅れた理由をめちゃくちゃ省略して話した。

だって、あの雪山であった事は俺の心の片隅に封印したいから……。

そんなことを考え、自分から心を沈めてしまっていると、ナナは知り合いという言葉に反応してか、キョロキョロと頭を動かしクーがいる方向でその動きを止めると

『……。』

『……。』

無言で見つめあい大きく2度頷いた。

俺がその意図をつかめず首を傾げていると、ニヤリと笑ったナナがゆらゆらと揺れながら立ち上がり

『主よ、クーの中は気持ち良かったかの？』

パリーンという小気味の良い音と共に俺の封印をぶち壊した。

何故だ……何故だ、何故だ、何故だぁ～！？

見つめあっただけで何故分かる？

ハッ、もしやクーが何らかのジェスチャーで教えたのかも。

俺は急いで振り向き、クーを視界に捉えると

『やはりか、主よ。

かまをかけて正解だったな。

我は特に気にせぬのだが、ミズハとランはどうだろうな。

さてそれでは入るぞ。』

悪魔のような言葉と共に首根っこを掴まれ、クーの無表情を見ながら我が家へと引きづり込まれた。

その後この小さな村にある男の悲鳴が響き渡ったのは言うまでもない。

2時間に及ぶ説教、というかお仕置き&小言を聞かされた俺。

ぐったりとしながらも家の主として、俺のいない間のことを聞くため、やけに素直なスズに話しかけていると、急にランが手を叩きながら立ち上がり

『説教も終わったところで師匠。
ナナさん達から大事な話があるそうだぞ。』
と、どことなく疲れた雰囲気を醸し出しながら発言した。
それをうけ、今度はミズハが立ち上がり
『そうだったです。
人間、ミズハ達をドンドルマに連れてくですよ。』
と、何の説明もない頼み事をしてきた。
本来なら聞き返すものなのだがこちらもつい最近、てか雪山にいたときに用事が出来ていたので二つ返事で了承。
ドンドルマ行きの竜車を用意してもらうために愛玩動物兼給仕のルビを呼ぶと
『ふにゃっ、らんにゃしゃまがいっぱいいるのにゃ！！
いったいどれが本物にゃのにゃ！？』

隣の部屋から呂律の回らない状態で歩いて来て、俺を見ると頭を抱えて倒れ込んだ。

そんなどう考えてもおかしいこの事態に、説明してもらおうと恐らくの犯人であるナナに視線を向けると、犯人は自分じゃないとばかりにランを指さしている。

本当か？と内心疑いながらランの方に視線を移すと、自分が犯人ですとばかりにキョドっていた。

俺はため息をつくとさっきの仕返しとばかりに尋問し、聞き出した。

なんでも、俺があまりにも帰るのが遅くて半錯乱状態だったルビを静かにさせるため、酔い潰してしまえとナナに言われて、俺のブレスワインを飲ませたらこうなったらしい。

まぁ結局のところ

『ランじゃなくてお前が犯人だろうが。』

『ぬおッ、痛いのじゃ主。』

ナナの言葉が原因なので、ナナには頭グリグリの刑に処した。

それが終わると竜車の手配をどうするかという話になったが、直ぐにスズがやってくれることに決定し、明日にはドンドルマに出発することになった。

さて、あの痴女師匠にどんなお仕置きをするか……。

到着するまでの1週間に色々考えて対策をしないとな。

帰宅（後書き）

今回はミニコーナー休止です。

キャラ紹介が必要だという方は感想とかに書き込んでくれたら嬉しいです。

到着（前書き）

更新遅れてすみません。
m（＿）m

到着

２勝５敗

これが何の戦績か分かる人は何人いるだろうか？

まぁ、聞いても分かる訳ないか。

正解は、１週間を通した俺の理性ＶＳナナ達４人からの誘惑との戦いだ。

見れば分かる通り俺の理性は惨敗。

俺が勝ったのは初日と最終日だけ。

その結果、竜車はかなり凄い匂いが充満していたので、ついさっき口止め料を操縦していたアイルーに渡した所だ。

後悔はしてない……と言うよりやれる訳がない。

理由は……皆様のご想像にお任せします。

でもまぁ、凄く良かったとだけ言っておこう。

そしてそんな風に俺を満足させつつ圧勝した彼女達は現在

『ほれほれ、我を満足させてくれるのじゃろ？

足なんかでこんなに感じて。
ほれ、何とか言わぬか。
この粗チ〇で我をどうするのじゃ？』
『うわ、何ですかコイツ。
道のまん中で情けない顔してキモいです。』
『……。』（じぃー）
『師匠、ナナさん達はほったらかしにして先に進もうぜ。』
チャラチャラした男を公開処刑していた。（ランを除く）
どうしてこうなったかと言うと、ドンドルマに到着して適当に歩いていたらチャラ男軍団が出現。
6人くらいで進路を塞ぎながらナンパしてきたので、少し怒った古龍三人娘がその中のリーダー以外を一瞬でノックアウト。
そして最後にリーダーを蹴り倒し今に至る、というわけだ。
なんでも俺とのデートを邪魔した男達を許せないらしい。
何とも嬉しい理由だが正直、俺的にはこの状況の方がキツイ。
ただでさえ美女に美少女を引き連れて視線を集めていたというのに、

道のど真ん中でこんなことをしているのだ。

視線を集めないわけがない。

汚い物を見るような目や、羨ましそうな……羨ましそう！？

いや、気にしないでおこう。

趣味は人それぞれだから、とやかく言うもんじゃない。

そんなことよりここから逃げる方が先決だろう。

俺は素早くランとアイコンタクトをかわして走りだし、ミズハとクーを小脇に抱えて路地裏に避難。

続いてランがナナの手を引いて路地裏に来るのを待つと、一先ず安心出来る場所を求め奥に進んだ。

安心出来る場所と言っても路地裏はスラム街同然だから、俺の目的地くらいしかないけどな。

いや、その目的地も危険か、主に俺が。

ズバリ言うと、目的地とは俺の師匠、カスミの経営しているいかがわしい店。

おそらくクーが持っていた媚薬もそこで入手したものだろう。

あの人は薬の調合と狩りの腕は確かなのだが性格に難ありというか、変態なのだ。

まだ少年と呼ぶに相応しい年代の俺を性的に食べようとしたり。
モンスターに媚薬を与えて自分に危害を加えた人間襲わせたり。
他にも色々あるがこれだけでも師匠がヤバイ人だというのは伝わっただろう。

まぁ、こんな師匠の所へナナ達を連れてくのは危ないと思うかも知れないが心配無用。

師匠は可愛いｏｒ綺麗な人・物が大好きで、それらは暴走しないかぎりとてつもなく大切に扱うのだ。

しかもその暴走する原因は酒で酔うか、新薬の実験対象がいない時、または開発が上手くいかずむしゃくしゃしている時くらいだから滅多に遭遇しない。

何故なら基本、師匠は天才だから実験対象を用意しないこともまずないし、開発が行き詰まることもほとんどないし、酒も特別なことが無ければ飲まないからだ。

今思えばあの頃、師匠はわざと実験対象を用意しなかったのかと疑うくらい良く忘れていた。

その度に俺を使って実験し色んな物を搾り取られた事を覚えている。

まぁ色々言ったが、要するに十中八九安全ってことだな。

そして、これらの師匠についての説明をナナ達にしていたらあっと言う間に路地裏の開けた場所に出た。

その説明の間ナナとミズハが驚いた顔をした後、クスクス笑っていたが一旦無視して、俺は気を引き締める。

ここの治安が悪すぎていつ襲われてもおかしくないからだ。

前来た時なんかスリに１０回以上盗られそうになった。

しかも、その半分以上が子供でその日は師匠にずっと愚痴を聞いてもらったのだ。

俺はこんなのを放っておいて正義の味方気取りしているギルドの連中の気が知れない。

それに気づいてもない町人もあれだがまぁ良いだろう。

今日は何故か子供達にも会ってないから、道端の手足とかが無い物乞いや、目がイッテる危ない人だけだ。

こいつらも可哀想っちゃあ可哀想だが大半が自業自得で同情する気はない。

子供達は突然孤独になったり、捨てられたり……何が起きたか分からぬ間にここにいる。

それに比べれば手足が無いのや、薬で狂ったやつなんか知ったことじゃない。

そんな事を考えながら歩いているとクイクイと腕を引かれ、そちらを向くと

『……顔、恐い。』

クーが無表情な顔で俺を見上げながらそう言った。

強面なのは元からだと拗ねそうになるがそうではないらしい。

どうやら過去を思い出してるうちに怒りを隠せなくなってたようだ。

俺はクーに謝りながら頭を撫でてやり、一応ナナ達にも謝ると

『気にするな、主よ。

確かにここの人間の視線は我も気にくわぬからな。』

『そうですよ、人間。

こんな腐った目の人間を見てたら誰だってそうなるです。』

と事情を知ってるラン以外が速答した。

一方、ランは少し暗い顔をして俺の顔を見た後、笑みを作り

『ナナさんの言う通りですね、師匠。

早くこんな所抜けてどっかに行っちゃいましょう。』

2人にあわせた発言をした。

まぁ2人の言った事から俺が過去を話してないのくらい分かるからな。

気をきかせてくれたのだろう。

心の中でランに感謝しつつ少し声が大きかったせいで、視線が若干痛くなってきたのでナナ達に声をかけて少しペースをあげる。

それからは絡んでくる変なやつを適当にのめしながら進み

『やっとついたな。』

『そうじゃな。』

『全然変わってないです。』

『……。（コクリ）』

『師匠……こんな所で何するつもりだ！？』

目的地、その名も“大人の玩具屋”に到着した。

天才登場（前書き）

遅くなってしまいすいませんm（__）m

今回はいつもより短め＋いつも通りの駄文です。

天才登場

あれからすぐに俺達は店に入っていった。

さっきの反応でも解ったが、少なくとも1度は来たことがあるのだろう古龍3人娘は迷いもせず走って奥の方へ行く。

品物の配置が違わなければ、ナナは大量のこけしモドキの所、ミズハはSMコーナー、クーは媚薬の所へ向かったようだ。

ちなみにランは恥ずかしいのか店に入ってからずっと、俯きながら顔を赤くして俺の手を握っている。

普段、男っぽく振る舞うからこうゆう行動はなんかこう凄いグッとくるんだよな。

いわゆるギャップ萌えってやつか?

あまりにも可愛いので俺は目の前に置いてある小さめのこけしモドキを手に取り

『もしかして、ランってこうゆうの使ってみたかったりする?』

と、からかってみた。

するとランは顔をいっそう赤く染め俺からそれを引ったくると

『お、オレにこんなのは必要ない。

その、師匠だけで充分……って何言わせてんだ。』

なんて言った後、自分で言って恥ずかしくなったのか、さらに顔を真っ赤に染め上げ、俺に八つ当たりするなり店の外に飛び出した。

しっかりとその手にこけしモドキを握りしめて……。

まぁ、金を払わず商品を店外へ持ち出すその姿は店の人からすれば万引きに見えるだろう。

そしてそれをこの店ですると、とにかくヤバイ。

どれくらいヤバイかと言うと『私はカスミ様の忠実なる雌犬です。』が自己紹介の台詞になるくらいヤバイ。

そんなことにランをさせないためにも急いで俺は走り出した。

しかしそれでも遅かったようで、すでに店の外には忍の格好をした白い鬼の仮面をつけた女が弓を構える姿。

そしてそいつから聞こえてきた冷静ながらも殺気を孕んだ

『カスミ様の店で万引きするなど万死に値する。』

という背筋が凍るような声に結構遠くにいて聞こえてない筈のランでさえ振り向いた。

その女はそれに舌打ちしつつも矢を3本一気に放つ。

ランは驚きながらもそれを何とか横に飛んで避け、反撃しようとしたのだろう、手の内にある物を見て一瞬固まるも

『こんなもんいるか！！』

と叫んでそれを女めがけて投げつけた。

結構な速さで飛んできたそれを女は反射的に避けてしまうが、通りすぎだ直後にに思い返したのだろう、慌てて振り向いて手をのばす。

しかし無情にもその手は届かず、哀れこけしモドキは地面にぶつかり、パキッと小気味の良い音を響かせ破損。

同時にピキッという効果音と共にその場の全員が固まった。

ランが固まるのはまさか壊れると思ってなかったからだろう。

だが俺と目の前の女は違う。

知っているのだ、師匠の玩具（さくひん）を侮辱するとどうなるかを。

まぁランに侮辱する気など無く照れ隠しでやったのなんかは誰でも分かるので、説明すればなんとかなるだろう。

なんて思ってた時もありました。

『久しぶりだな、馬鹿弟子。

3年ぶりくらいか？

あの時は……いや、やめとこう。

それよりあいつら以外にも可愛い弟子連れて来てんだろ？

さっさと中に入って酒飲むぞ。』

この声を聞くまでは……。

師匠が初見の人と酒を飲むってことは前も言った通りかなり危ない。

てか、師匠はそういう人を酔い潰して食うことを（もちろん性的に）目的としている。

よってバレようがバレまいが、ランが食われる可能性は有るわけだ。

でもまぁ、バレない方が断然良いよな。

そこまで考えた俺は振り返り

『お久しぶりです師匠。

俺の可愛い弟子はやれないですけど、最近飲んでないんでありがたくいただきますよ。

今呼んでくるんで中で待っててください。』

上辺だけの笑みを作ってそう言ってやった。

何故そんな顔をするかと言うと、ここを離れる理由になった3年前のことを、このカスミという傍若無人の言葉が一番似合う女が後ろめたく思っているからである。

俺はこれっぽっちも……とは言い切れないがもうほとんど気にしてないというのに。

だからこのネタで散々いじめて今までの復讐をした後、説教してやるつもりだ。

師匠らしくないからいつも通り笑って、凄い玩具作って、エロいことばっかしてろって。

だから想像以上に辛そうな顔を師匠がして、その背中が壊れそうなほど小さくても俺はそれを黙って見送った。

そして師匠の姿が見えなくなるとすぐに俺は動きだし、最初に壊れたこけしモドキを回収。

次いで固まったままの女にそれを握らしてから、同じく固まったままのランを回収すると再び店に入っていった。

ちなみに何故こけしモドキを渡したかと言うと、ミズハと同じ雰囲気、つまりドMだと直感で思ったからだ。

そしてその直感は当たっていて直後に息を荒げながら師匠に嘘の報告をする女を見ることになる。

過去の話・前編（前書き）

いつもの事ながら更新遅れてすいませんm（__）m

今回は前後半の温度差が激しいシリアスもどきです。

支離滅裂かもしれませんがどうぞよろしくお願いします（ 0 ）

／

過去の話・前編

店に入ってからはあの鬼仮面のおかげでランが酷いめにあうこともなく、師匠との世間話から始まりそのまま酒盛りへと自然に移行した。

そんな中、俺は久し振りの酒を胃に馴染ませるように、チビチビとブレスワインを飲んでいる。

俺が酔ってる間にランが被害にあうのも嫌だし、人が酔うのを見る事自体も好きだからだ。

そんな俺の楽しみを絡んできて邪魔をする師匠は、ミズハとナナを横に配備しているので俺の安全は保証済みだ。

なんか俺との行為を報告してるっぽいが気にしたら負けだからな。

酒より食べ物優先らしいクーの食事風景をつまみに飲みすすめる。

『なあなぁ～、なあってばししょ～。

チューしようぜチュー。』

ちなみに師匠達に弄られた恥ずかしさからブレスワインを一気飲みしたランは、早々に酔っぱらってこんな感じでずっと絡んできている。

可愛いには可愛いが少々鬱陶しいので、リュウノテールのステーキを口に突っ込んで黙らせた。

モガモガ言ってるが死ぬことはなさそうなので無視。

同じくリュウノテールを口一杯に頬張っているクーを見ながら再び酒を一口啜る。

この殺伐とした光景の中でクーは唯一の癒しだからな……骨をバリバリ食わなかったらもっと良いけど。

なんてったってクーはクシャルダオラから人型になったから、ある程度風を操れるわ、岩を噛み砕けるわで見た目に似合わずかなり強い。

初めて会った時だって、あの吹雪の中をヘビーボウガンで狩りに行き、ドスファンゴをいとも容易く仕留めて晩飯として振る舞ってくれたから、ハンターとしてもかなり強いと思う。

欠点としては狩り場に行くと十中八九悪天候に見舞われることかな。

まぁ、クー自身はたとえ吹雪の中であろうとほぼ百発百中だと豪語しているので大丈夫だけど。

それより俺が出ていった3年とちょっとの間に、クーをそこまで成長させた師匠にはやはり感心する。

竜車の中で聞いた話だとクーだけでなくナナ達4人にも戦い方を教えているみたいだ。

しかもそれぞれが★★★★のクエストをソロで余裕に成功するくらいの実力はあるらしい。

これは元からナナ達が凄いのか、師匠の教え方が凄いのかは分からないが、どちらにしろ驚くべき事だ。

普通ハンターになるためには5年間養成所に通うか、実力のあるハンターに師事して許しを得ないといけない。

俺は4年でハンターになれたからちょっと自慢だったのに1年近く負けてて非常に残念だ。

あの俺を押さえつける力を考えれば不可能じゃないのは理解出来るけどな。

一先ず口の中の物を飲み込んで抱きついてきたランに口移しでブレスワインを飲ませてやる。

自分から言ってきたくせにランは、きゅ～なんて奇声をあげながらテーブルに突っ伏した。

やっぱりこうゆうのをするのは楽しいなぁ～、とほろ酔いながら思っていると

『お～熱々だね。まるで昔の私達みたいだ。』

『ぬしぃ～ランにだけ卑怯じゃ。

我にもしてくれ～。』

『ミズハにも、ミズハにもするですよ。』

『……羨ましい。』

どうやら上機嫌になってるらしい４人から声があがる。

ランから視線を外し全員の顔を見てみると、クー以外は酔ってるせいか頬を赤く染め、瞳を潤ませているのでなんかエロチックだ。

言ってる俺も約３年ぶりの酒に早くも酔ってるが、今日は気分が良い。

精々楽しもうじゃないか、なんて心の中で呟きつつ机を挟んで目の前にいる素面のクーを抱き上げ向かい合わせで膝に乗せる。

この行動で何か勘づいたナナとミズハが騒ぎ立てるが気にしない。

一塊で座っている３人に視線を送ってから、酒を口に含みこちらを見上げているクーに口移しで飲ませる。

そして見せつける様に舌を絡めた後、クーの小さい口に収まりきらず溢れた酒を舐めとってやった。

クーはぽけ～とした顔でそれをうけていたが、一瞬ナナ達を見てフッと笑ってすぐに無表情に戻り、俺の胸板に額を擦り付けてきた。

あまりの可愛さにいけない衝動にかられそうになるが何とか抑え込み頭を撫でてやる。

俺のことをロリコンと言うやつがいると思うがそれは違うぞ。
だってクーは俺の４倍くらいの年齢だし、卵だって産んだことあるんだからな。
でも、見た目はロリだから関係ないか。
もう、この際だから言っておくが俺の守備範囲は男とババアと小さすぎる子以外の大体だ。
と、言ってもクーやミズハみたいなのは、滅多な事がない限り抱くことはない。
てか、今まででもこの２人以外抱いたことはない。
それに理性が崩壊していたり、媚薬を飲まされていない限り今後も増えることはないだろう。
つまり一生増えることは無いってわけだな。
それにそんな未来のことより、今直面している問題だ。
口から炎を漏らす青髪美女と口から毒を漏らす紫髪美少女がなんか凄い形相で近づいて来てるんだよ。
それにクーが逃がさないとでも言うかのようにしっかりと抱きついているので逃げれそうにない。
かと言って師匠が助けてくれる訳が無いので自力で頑張らないとな。

一先ずニッコリと笑いながら手招き。
2人ともフシャーと奇声をあげながらも近づいてくるので、空になったグラスにブレスワインを注ぐ。
そしてそのグラスを持ち上げて
『どっちが先にやってほしい？』
なんて自惚れてるな、と自覚しながら質問。
そんな質問に2人は暫く固まった後、グラスと俺の顔を交互に見つめて
『我が先じゃ！！』
『それだったらミズハが先です！！』
『じゃあ私が先にしてもらおうか。』
『『どうぞ、どうぞ……あれ？』』
突然の師匠の乱入にも慌てることなく見事なコントを見せてくれた。
2人は混乱しているみたいだが、そんなの関係ないとばかりに師匠

はズカズカと接近してくる。

俺は少し戸惑いながらも笑みをうかべ、ブレスワインを口に含もうとしたが何故かそれを師匠に阻止された。

疑問に思って師匠に視線を移すとその目には溢れそうな涙。

その訳を問い質す間もなく、師匠は俺の口に自分のそれを押し当て塞ぐ。

師匠にしては珍しく舌の入ってこない幼稚なキスだ。

俺は戸惑ってしまったが、何かを察したクーがするりと俺と師匠の間から抜け出すと、師匠が口を開いた。

『馬鹿弟子……私だって寂しく感じる時くらいあるんだぞ。』

思わず吹き出す。

あまりにもいつもの師匠と合致しなくて

『何言ってるんですか師匠、酔ってるんですか？』

と、少しふざけて言葉を返す。

しかし、師匠は力なく笑い俺の頬を撫でながら

『こんな気持ちで酔える訳がないだろう。
今だって寂しいんだ。
こんなに近くにいてもお前との距離が遠く感じる。
やっぱりあの時の事がまだ許せないのか？』
テンションを変えることなくそう聞いてきた。
あの時の事……それを思い出しただけでどす黒い感情が湧き出してくるが、無理矢理笑みを作り
『そんなこと無いです。
もう3年も前の事ですよ。吹っ切れました。』
バレバレな嘘をついた。
師匠は沈んだ顔でそうか、と呟き頬を撫でていた手を下ろすと、力ない笑みをうかべ
『実はな、私孤児院を作ったんだ。

お前がスリする子供を見て怒ってたのを思い出してな。
分かってる。これが自己満足と偽善だってことは。
でもあの子達がいなかったら私は死んでた。』

と言った。

これには驚愕する。ドンドルマの英雄、そして尊敬していた師匠がここまで弱ってるなんて信じられなかったから。

しかし、師匠はさらに驚くべき事を言った。

『実際に腕を切った事もあったんだよ。

けどその時は私の下部が救ってくれた。

フフッ少し前まで私を殺そうとしてたくせにね。

「こんなに弱ってる貴女なら何時でも殺せますから。」だってさ。

本当に3年前、なんであんな酷い事をしたのか自分でも理解出来ない。

今となっては悔やんでも悔やみきれないよ。

なぁシン、許してくれとは言わないから……せめて前と同じように接してくれないか？』

師匠が腕を切ったと言ったのだ。

それは自ら命を絶とうとしたということ。

俺が浮かれて、絶望して、それを師匠に押し付けて逃げたがために……。

俺はそれが情けなくて、悲しくて、師匠の小さな身体をそっと抱き締めた。

過去の話・後編（前書き）

遅くなってすいません。

いつもにも増して駄文です。

過去の話・後編

何時間も……いや、本当は数分くらいなんだろうが、俺は師匠を抱きしめながら師匠が落ち着くのを待っていた。

耳には必死に押し殺そうとしている嗚咽が聞こえる。

それを聞いて俺も泣きそうになったが、グッと堪えて師匠の背中を撫で続ける。

そうしていると、ある時から泣き声が寝息に変わった。

俺は聞こえてきた寝息に苦笑したが、急に涙が込み上げてきて、慌てて目頭を押さえる。

それでも収まらない涙が溢れないよう上を向いていると、視界の隅にに困惑した顔の４人が映った。

俺は慌てて目元を拭い『何でもない』と言おうとしたのだが、悲しそうな４人の顔に別に話してもいっかと考えが変わり手招きする。

そして４人が目の前にならぶと

『これは俺の昔の女の話だ。

聞きたくないなら聞かなくても良い。

だが、出来れば聞いてくれ。』

と前置きを言って、１人もいなくならないことに安堵しつつ話し始めた。

～回想・３年前～

あれはだいたい俺が狩りに慣れてきて浮かれていた時のことだ。

俺にはリンという恋人がいた。

正直顔はどこにでもいそうな感じだったが、それでも明るくて優しい彼女を俺は好きだった。

初めての出逢いが、クエスト中イレギュラーが発生して死にかけの俺を、秘薬を使ってまで助けてくれたってのもあるかもしれない。

最初の告白を『まだお互いの事知らないでしょ。』と笑顔で断られ。

ならこれから知りあいましょうと食事へと連れて行くこと数回。

彼女は優しい人が好きだと分かり、ライトボウガンを使う彼女の狩りを手伝うこと十数回。

そこまでに２回フラれている俺は、二度あることは三度ある……じ

ゃなかった。

三度目の正直という言葉を信じて告白した。

数秒黙っていた彼女はまた笑顔になり、またフラれるのかと身を縮込ませた俺の耳に

『しょうがないなぁ〜。

シン君危なっかしいし、頑張る姿も可愛いから、付き合いましょう。』

と聞こえてくる彼女の声。

俺はもう嬉しくってその場で跳ね回った。

付き合ったことなら何回もあったのに、そのどれよりもその時が一番幸せだったのだ。

そしてそれからの俺達は、周りで見ている人全員が胸焼けするくらいイチャイチャしっぱなしだった。

今思い出しても恥ずかしい。

所謂バカップルだったってことだな。

まぁ、そんな感じで俺達が付き合いだしてだいたい４ヶ月ぐらいがたった頃だ。

俺は彼女を師匠に紹介するため店に来ていた。

店の名前は今と変わらず“大人の玩具屋”。

当然彼女も戸惑っていたが、中に入ってみれば今とは違う明るい師匠のお出ましだ。

すぐに打ち解けて狩りの話から下ネタまで色々と話してたっけ。

そして何故かは知らないが、話の流れでその日から俺と彼女も師匠の家に間借りすることになったんだ。

それからもイチャイチャしたり、狩りに行ったりと俺達は幸せにくらした。

いや、幸せなのは俺だけだったのかもな。

忘れようにも忘れられない。

付き合い始めて1年目の記念日に、その事件はおきてしまったんだ。

その日は記念日ということで、師匠が酒やら料理やら色々用意してくれていた。

正直3人じゃ到底食い尽くせない量だったが、師匠の祝ってくれる気持ちが嬉しくて、俺はいつもの倍以上の量を飲み食いした。

その結果、当然ながら俺はダウン。

そんな俺を見て笑っている彼女が愛しくて、当時の俺は酔った頭でもずっと見ていたいと思ったのだろう。

『俺はリンと絶対結婚するぞ～。

幸せにしてやるからなぁ～覚悟しとけ～！！』

と酔った勢いでプロポーズして、恥ずかしさから逃げるように目を閉じ、そのまま達成感と共に眠りについた。

今思うとその時俺が寝なければ、もう少しの間この仮初めの関係も続いていたのかもしれない。

それから数時間が経った頃、俺は猛烈に腹が痛くなって起きるとすぐさまトイレに向かった。

そして用を足し終え部屋に帰る途中、何やら音が聞こえる。

家具の壊れる音、硝子の割れる音、師匠の怒鳴り声、彼女の叫び声。

その音の正体を認識した瞬間、俺は駆け出した。

また師匠がギルドの連中に襲われ、それに彼女が巻き込まれたんだろう。

そう思って音のした部屋のドアを開けると、予想外の光景が目に飛

び込んだ。
彼女を押さえ込む師匠。
そして彼女の右手には鈍く光る刃物がある。
それだけで俺は理解した。
『師匠何をして……いや、何がおこったんだ？』
彼女が襲撃者だと。
その後、彼女を殴って気絶させた師匠の口から語られたのは俺の想像と大差なかった。
俺が酔い潰れたすぐ後、師匠は酒のつまみが無くなったと言い、お開きにしてすぐ寝室に行ったらしい。
そして眠ろうとしたところに彼女が現れ、現在にいたる。
と、大雑把だがこんな感じの説明だったと思う。
そして説明が終わると師匠は彼女を担ぎ上げ、俺に『ついてこい』とだけ言うと部屋を出た。
半ば放心状態だった俺は生返事をすると黙ってついていく。
そしてふと気付いた時には目の前に檻が並んでいた。

この檻は何度も見たことがある。
師匠を襲った人間が放り込まれ、分別される所だ。
分別というのは、廃人にするか、玩具にするか、モルモットにするか、部下にするかを師匠が決めること。
そして今回は彼女がそれをされるわけだ。
事態を飲み込み理解すると

『師匠……2人だけで話をさせてくれ。』

俺の口は無意識に動いていた。
師匠はそんな要求をした俺に冷めた目を向けると、彼女を投げ渡し無言で去っていった。
その行為を勝手にしろという意味で解釈した俺は、彼女を軽く頬を叩いて起こすと

『ここから逃げるぞ。』

と言って彼女を引き起こし、駆け出そうとした。
しかし、いくら引っ張っても彼女は動こうとしない。

苛立って振り向くと俯いた彼女が

『ねぇ、シン君。

理由を聞いたりしないの？』

と全く抑揚のない声で問いかけてきた。

知りたいが知りたくない。

そんな微妙な所をつくその質問に、引っ張っていた手を離す。

それを俺からの返事として受け取った彼女は口を開いた。

『アレン……まぁ分からないよね。

1年と半月くらい前にあなたの師匠に壊された男で私のお兄ちゃん。

賢くて強くて……ギルドナイトになって綺麗な奥さんもいて……。

お兄ちゃんは私の誇りだったんだよ。

そんなお兄ちゃんがある日壊れて帰ってきた。

話を聞こうとしてもバカみたいにごめんなさいしか言わなくて、たまに暴れたりもした。

私は真実を知りたくて、お兄ちゃんの職場に行って話を聞いてみたら、カスミさんがやったって教えられたの。

私、情報を集めるために何時間も走り回った。

シン君がカスミさんの弟子って知ったのもその時ね。

そして疲れて家に帰った私の前に赤黒く染まった奥さんとお兄ちゃんがいたの。

たぶんお兄ちゃんが奥さんを殺して、自殺したんだと思う。

2人とも悲しそうな顔で冷たくなってたよ。

それから葬儀をしたり色々と忙しくて考える暇もなかったけど、一段落ついた時カスミさんが憎くて憎くてどうしようもなくなった。

すぐ復讐って言葉がうかんできたけど、カスミさんが強いのは知ってたからその方法が思い付かない。

困っていた私にお兄ちゃんの同僚っていう人が、突然復讐計画を提案してきた。

計画は簡単、もう……わかるよね？

私がシン君……あなたと付き合って親密になれば、カスミさんとも自然と接近する。

そうすればいつでも殺せるって。

私は二つ返事で承諾して、実行した。

ただ誤算だったのが、シン君を好きになってしまったのと、カスミさんが良い人だったこと。

ついさっきまでこのままでもいいかなって思ってた。

でもシン君が結婚しよう、って言ってくれた時、お兄ちゃんと奥さんの顔がうかんだの。

あんなに幸せそうだった2人が悲しそうな顔で死んでたのに、私1人が幸せになったらだめでしょ？

長々と話したけどこれがカスミさんを襲った理由。

でも信じて……私はシン君を愛してるから。』

そこで彼女は息をはいて俺から一歩離れた。

その一歩が俺と彼女との大きな壁に見えて慌てて近づこうとする俺に

『だから私は逃げない。

今まで幸せな時間をくれてありがとね。

心配してくれるのはありがたいけど、やっぱり罰はうけなきゃいけないから。

カスミさんにごめんなさいって言っといてね。』

と泣きそうな顔で言うと、懐から何かを取り出しそれを口へと放り込んだ。

一瞬それが何か分からなかったが、喉を押さえて苦しみだした彼女を見て毒だと理解すると、急いで師匠の元へ彼女を運びこんだ。

師匠なら助けてくれると思ったから。

しかし、そんな希望はいとも簡単に打ち砕かれた。

師匠は苦しむ彼女を見ると

『そんなやつ放っておけ。胸くそ悪い。

私は飲み直すから片付けとけよ。』

と言って去っていったのだ。

ついさっきまで楽しく会話していた彼女をまるでゴミであるかのように見て。

それから俺は必死に解毒しようとしたがかなわず十数分後、彼女は息を引き取った。

そして俺は彼女を埋葬して、師匠の元を黙って離れた。

〜回想・終了〜

『まぁ、だいたいこんな感じだ。

今思えば師匠は全然悪くないんだよなぁ。

殺そうとしてきた人間を助ける必要なんかないしな。』

今までの話をそう締めくくった俺は４人を見つめる。

４人が４人とも難しそうな顔をしていたが、意を決したようにランが

『オレも誰が悪いってのは言えないと思う。

カスミ様だって師匠が結婚したいと思うほど信頼してる人に裏切られて冷静でいられるわけないからな。』

と自分の意見を言うと

『うむ、誰が悪いとは……いや、これはギルドのせいじゃ。
それで主とカスミの仲が悪くなるのは許せぬな。』
『お姉さまの言う通りです。
腐ったギルドをぶちのめしに行こうですよ。』
『それはダメ……まず仲直り。』
と各々の意見を言い始めた。
どれも俺の意見に同意してくれているようでありがたいが、本心なのかと疑ってしまう俺がいる。
そんなわけないのにな。
でもこいつらは俺をフォローするためだけに……いや、やめておこう。
どうやらこのまま起きていたら、こいつらまで傷つけそうだ。
『悪い、話してたら疲れた。
先に眠らせてもらうわ。』

俺はそう言ってから師匠を寝室に運びこんで、眠りについた。

過去の話・後編（後書き）

今年で受験生になってしまったので今後、更新がさらに遅くなるかもです。

人物紹介的な何か（お知らせ含む）（前書き）

すいませんm（__）m

どうにも意欲がわかなくなってしまいましてここで一旦更新を凍結したいと思います。

受験が終われば時間も出来ると思うのでその頃には更新を再開するつもりです。

それまでお気に入り登録を続けていただければ幸いですが……まぁ無理でしょうね。

他の2作品はこれほど行き詰まってないので更新もあるかもです。

人物紹介的な何か（お知らせ含む）

名前・シン

身長・１７５？

愛用防具・モノブロスＳシリーズ

愛用武器・ブラッシュデイム

黒髪のウルフカットで少しつり目のちょい強面のイケメン。
体型は少し細身に見えるが無駄な脂肪もなくがっちりしている。

昔は街で悪友達とやんちゃしていた普通の少年だったが、ある事件をきっかけにハンターデビュー。

それからはカスミに師事してメキメキと頭角を現し大都市ドンドルマでそこそこ有名なハンターとなる。

しかし、ある事件が起こったために逃走、現在にいたる。

Ｓっ気のある絶倫男。ロリコンの疑いあり。

名前・ナナ

身長・１７２？

愛用防具・エンプレスシリーズ

愛用武器・ナナ＝フレア

青髪の腰まであるロングストレートで金眼の誰もが認める美女。
体型は出るところは出て、締まるところは締まっている理想的なプロポーション。

ミズハが酒を飲みたいと盗んできた、酒樽の中身を飲んだら何故か人型になってしまったナナ・テスカトリ。

ティオとは夫婦だったがティオを見事に倒したシンに惚れこみ、半ば無理矢理に肉体関係を結ぶと家にまでついていった。

Ｓっ気もＭっ気もあるバイのエロ娘。

名前・ティオ

身長・１８１ｃｍ

愛用防具・カイザーシリーズ

愛用武器・テオ＝ロア

腰近くまで伸びた赤髪に金眼の優男。
ガッチリした体つきに時折舞う火の粉がどこか神秘的。（ぶっちゃけちゃうと禁書のタバコ吸ってる神父さん）

ナナと同様ミズハが盗んできた酒樽の中身を飲んで人型になったテオ・テスカトル。
暇潰しのため人里近くの砂漠に現れ３度に渡りシンと戦うも『あっこれ勝てないわ。』と軽いノリで諦め死んだフリをした。
しかし、そこを目撃していたナナのシンへの告白に激怒、襲いかかるも敗北し下僕となる。
良いやつだからこそ弄られるちょっと可哀想な男。

名前・ミズハ
身長・１５０ｃｍ
愛用防具・ミズハシリーズ
愛用武器・マジナイオカリナ
髪形は紫色で癖のあるショートボブ。
オオナズチの名残なのかくりくりとした渦巻きみたいな模様の入った金眼で眼鏡をしている。

体形は見事なつるぺったん。

ナナ達が人型になる原因の樽を盗んだ張本人。

シンに初めてを奪われるまではナナに絶対の忠誠を誓っていたが、今では恋敵兼百合な関係の不思議なポジションにいる。

オオナズチの能力をほぼ完璧に使えるらしくステルスから体力を奪う毒液、果ては長い舌を使って物を盗んだり、ナナとねちょったり……。

かなり変態な事をするのに特化しているドＭな妄想娘。

名前・ラン

身長・１６９ｃｍ

愛用防具・イーオスＳシリーズ（男用）

愛用武器・デスパライズ

短いオレンジの髪に碧眼の綺麗と言うよりはかっこいい感じの顔。

常日頃から鍛えているので引き締まった体をしている。

胸は標準より大きいが普段は晒しを巻いているため目立たない。

女だからとなめられるのが嫌で男っぽい口調に一人称はオレ、防具も男物にしている。

女なのに伝説のハンターとまで言われているカスミに憧れ、ハンターデビュー。

新米時代に危機に陥っている所をシンに救われ、それ以後弟子入り、もといストーカーに近いことをして漸くシンと結ばれた。

ヤンデレ風味の一途なオレっ娘。

名前・ルビ

身長・８３ｃｍ

愛用防具、武器・なし

アイルーなのに黒毛で赤眼。

その容姿のためアイルーやメラルー達からも仲間外れにされ絶望している時にシンと出会い、以後給仕アイルーとして働いている。

シンに身も心も捧げる覚悟をしているが種族の壁に阻まれ、昔はどうにかして人間になれないかと考えていたが、現在はもっぱら盛りのついた雌猫共（ナナ達）を追い払うことに専念している。

主に忠誠を誓う小さな猫メイド。

名前・レオ

身長・１９２ｃｍ

愛用防具・リオソウルシリーズ

愛用武器・鬼神斬破刀

サラサラの金髪で碧眼のナルシスト臭漂うイケメン。
体形は筋肉がしっかりついていて、若干顔とアンバランスなため、人前では防具をつけっぱなし。

ドンドルマ時代からいつも自分の一歩も二歩も前を行くシンに嫉妬。
シンの永遠のライバルとして日夜鍛練をつんでいるが、シン自身はそこまでレオを意識していない。

ライバルというより引き立て役な残念な男。

名前・スズ

身長・１５３ｃｍ

愛用防具・ヘルパーシリーズ

愛用武器・双剣ニールイタメール

茶色い髪を首の辺りで１つにくくった可愛い系の女の子。

体形はミズハを一回り大きくした準つるぺったん。

シンが来る少し前からジャンボ村で小さい酒場兼ギルドを経営。

触れなくはないが男嫌いで、レズビアンになった。

ドンドルマのギルドで洗脳的教育をうけていたため若干歪んだ考えを持っていたが、ナナ達の説得、もとい調教により少なくともギルド至上主義ではなくなった。

語尾に「〜〜っす」とつくボクッ娘レズ看板娘。

名前・クー

身長・１４１ｃｍ

愛用防具・クシャナシリーズ

愛用武器・グラン＝ダオラ

サファイアのような瞳に美しい黒髪のショートボブ。
だが、髪は手入れを怠ると赤茶色のボサボサな髪になってしまう。

体形は幼女としか言いようがない。

ナナやティオと同様ミズハが盗んできた酒樽の中身を飲んで人型になったクシャルダオラ。

雪山で生活しており空から降ってきたシンを助けた命の恩人……
…だったのだが、媚薬を用いて肉体関係をもったので、下手にバレたらシンを社会的に抹殺されてしまう状態に追い込んだ。
基本無表情、寡黙な性格でガンナーとしての腕もピカ一。

クシャルダオラの能力も使え、多少なら風を操れるが、砂漠以外の地域では確実に悪天候に見回れる。

雨女なクーデレ幼女。

名前・カスミ

身長・１７８

愛用防具・凛・皇シリーズ

愛用武器・龍刀【朧火】

肩甲骨まである赤色の髪に、鋭く力のある瞳。

日に焼けた褐色の肌で胸はそれなりにしかないが、スラッと引き締まっていて、雌豹を思わせる魅力的な体つき。

シンを狩りの世界に引きずり込みハンターの技術、ついでに性技まで教え込んだシンとナナ達の師匠。

自身の実力も高く、女性でありながらドンドルマの英雄とまで言われていて、ランの目標でもある。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7452i/

モンスター・ハンター・ドス～俺の彼女は古龍達～

2011年7月4日19時24分発行